みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

マダガスカルにおけるオーストロネシア系言語由来の植物名称の意味変化

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Austronesian, Malayo-Polynesian, Malagasy, Plant name, Baobab, Semantic change, Sanskrit, Loanword 作成者: 崎山, 理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003937

国立民族学博物館研究報告33(2): 227-264 (2009)

マダガスカルにおけるオーストロネシア系言語由来の植物名称の意味変化

崎　山　　理*

Austronesian etymologies and semantic change of plant names in Madagascar

Osamu Sakiyama

本稿は前稿（崎山 1991; 1999）を承け，前稿で見落とした資料およびその後の資料，文献によってマダガスカルにおけるオーストロネシア語族（とくにそのなかのマライ・ポリネシア語派に属する言語）起源の植物名称を追補し，また前稿で記した項目を補訂したものである。前稿以降，刊行された資料として，マダガスカル関係では Boiteau（1999），フィリピン関係では Madulid（2001）が，掲げられた項目と地方語を含む質，量の点で従来の類書のレベルを凌駕する。これらによって Dempwolff 1938; Blust 1980–1989; 1988; Verheijen 1984; Wolff 1994 が再構成した植物名称の祖語形から変化した語彙として，マダガスカルの形が示されていないものを補い，著者が今回あらたに再構成した祖語形を提示した。マダガスカルの植物名称は他の言語との間で意味のずれが大きく，これまでその語源が解明されていないものが多い。また本稿では西暦四世紀の中国資料『南方草木状』などを参照し，サンスクリット語の借用語にも着目して，マダガスカルの言語が分岐したころのマライ・ポリネシア語派における植物認識を比較言語学的手法により一層精密化することを試みた。

The following set of Austronesian-inherited Madagascar plant names is the third of the sequels supplementing and revising Sakiyama (1991 and 1999). In this contribution, I have added new Madagascar data to Dempwolff (1938), Verheijen (1984), Blust (1980–1989; 1988) and Wolff (1994) and shown some Sanskrit names (S) which are suspected of having been bor-

*国立民族学博物館名誉教授

Key Words：Austronesian, Malayo-Polynesian, Malagasy, Plant name, Baobab, Semantic change, Sanskrit, Loanword

キーワード：オーストロネシア語族，マライ・ポリネシア語派，マダガスカル語，植物名称，バオバブ，意味変化，サンスクリット語，借用語

rowed at the Proto Western Malayo-Polynesian stage. Added items are printed in bold type, and a plus sign (+) before an entry implies a revision to my previous papers.

Semantic change brought about in Madagascar gives in some cases interesting examples; PMP **baliDa*/**baliga* (by-form) 'weaver's sword, beater-in' has become *valiha* 'bamboo sword' involving its material '*Dendrocalamus strictus*' (a species of bamboo with long haulms) in Betsimisaraka. The Merina makes use of this type of bamboo in marking the musical instrument called *valiha*, which Dempwolff ignored for his reconstructed form **balija*, presumably because of the great difference in meaning. Another type of change took place on the analogy of plant shapes; PMP **bu(n)tung* '*Barringtonia* spp.' (fish-poison tree) transformed into *vontona* '*Adansonia digitata*' (*digitata* baobab) in Sakalava due to the resemblance of their flowers with white petals and brush-like stamens with numerous pink and white filaments. A few cases show plant names turned into common substantives; **kananga* '*Canangium odoratum*' (ylang-ylang) has come to mean 'luscious' in the Merina *hanana*/*hananganana,* while **pulut* '*Urena lobata*' (hibiscus burr) naturally changed into *folotra*/*folo-polotra* 'low trees, bushes or anything which intercepts the sight' in Merina.

1　はじめに
2　研究対象と記述上の留意点
3　オーストロネシア系由来の植物名称リスト
4　むすびにかえて

1　はじめに

マダガスカルの言語の歴史的系統的位置は，オーストロネシア語族の西部マライ・ポリネシア語派，そして東部バリト亞語群（カリマンタン島東南部）という下位に分類され，この亞語群のなかで Ma'anyan, Dusun, Paku などとともに Malagasy「マダガスカル語」も含まれる。Ma'anyan と Malagasy の比較をはじめて行ったのは Dahl（1951; 1991）で，現在，Dahl 説が，オーストロネシア比較言語学のなかで一般に認められるところとなっている。その最初の移動はすでにインド文化の影響を受け，かなりのサンスクリット語借用語を含んでいた西暦 400 年ごろに始まった，と Dahl は

いう。カリマンタンとマダガスカルとは，その間にジャワ，スマトラという大きな島で遮られている一方，その西方にはさらにインド洋が大きな障壁を作って立ちはだかっている。にもかかわらず，マダガスカルの言語がこのように遠く離れたカリマンタン島東南部の言語ともっとも近い系統関係にあるというのは，新大陸は別として世界の他の語族ではほとんど類例を見ないといってよい。ただし，今後の重要課題は，これまで十分調査されていない Ma'anyan を含む東部バリト語群との比較研究である。従来の研究は，数百に満たない語彙（部分的に Malagasy 語彙を含む）の音韻論的考察だけであって（Hudson 1967），現実の要求にはほど遠い。

このような状況のなかで，インド洋を目前にしたスマトラを基地とする移動が西暦 7 世紀に始まり，マダガスカルの言語の語彙のほとんどが，Malay などほかの言語の借与による借用語だというのが Adelaar（1989）の説である。しかし，現在のスマトラの言語のいずれがマダガスカルの言語と近縁なのかはまだ証明されていない。また Malay ほかを借用語とみなさなければならない環境的状況も十分に示されたとはいえない（崎山 2004）。英語におけるノルマンフランス語，日本語における時期を変えての中国語はいずれもおびただしい借用語の源となったが，それは距離的にも近く，頻繁な交流の結果によるものであった。また絶大な宗教の力がインドネシアにおけるサンスクリット語からの借用語を圧倒的なものにした。さらに近現代においては，支配，被支配という政治的・文化的力関係が借用語の発生にも大きく影響していることはいうまでもない。マダガスカルと当時のインドネシア地域との関係はこのいずれにも該当せず，借用語を生み出すような持続的な条件が備わっていたとは到底考えられない。Malay と隣接する Javanese，あるいは大きな困難なく接触できたフィリピンの Tagalog との間と状況は異なる。むしろ常識的には，Malay と Malagasy とは簡単に借用関係が起こらない状況にあったというべきであろう。しかし，Adelaar の借用語論では ad hoc な語彙の音韻変化が強調されるばかりで，社会的，文化的要因は断片的に述べるのみである。しかもマダガスカルに渡来した初期の移民はバリト語群の話者だけではなく，異なる言語的，文化的背景をもった東南アジアの移民群によって構成されていた（Adelaar 1995）とまでいう。これをそのまま素直に解釈すると，長期的でかつ具体的な移住計画が東南アジアのどこかで立ち上げられ，遂行されたことになる。ならば，そのような計画はなぜ始まったのか，その提唱者は誰だったのか，航海におけるどのような役割分担があったのか，どのような共通語が用いられたのか，そしてマダガスカルにおいて言語の核心部分である文法を Ma'anyan から維持しながら語彙は Malay から多くを継承したのはなぜかなど，おそらく簡単に明らかにしよう

もないいくつもの疑問が噴出する。Malagasy の形成は，接辞法，統語論の面でも借用語説＝言語単系説では説明できない側面を多く含む。ただし，本稿の主旨ではないので，詳しくは崎山（1991）を見ていただきたい。

なお，17 世紀後半からほぼ 2 世紀間にわたり，オランダ東インド会社によって強制的に移住させられた Malay を話す集団が，現在の南アフリカ共和国の公用語 Afrikaans にかなり特定化された分野での借用語を与えている（崎山 2002）。借用語の特徴は，もともとそのようなものである。

2　研究対象と記述上の留意点

本稿は前稿（崎山 1991; 1999）を引きついで，植物名称の形成ならびに意味変化を研究対象としたものである。郷里とは異なるマダガスカルの自然界を言語で認識するとき，他の生物種に比べ植物に対しては意味変化を伴いながらも，圧倒的に郷里の言語が残されているのはなぜか。例えば，Vezo はマダガスカル西南部の漁民であるが，その民族名の由来はインドネシアの漂海民 Bajau または Bajo といわれることがある。ただし，*bazaw から vezo への変化には第一音節母音が問題となる。しかし，カヌーはスリランカと共通するシングルアウトリガー式，シャンティング操法（風向きに対し帆柱の位置を舳先や艫に移動させる）を行ない，これはミクロネシア，メラネシア地域と共通するものの，インドネシアの Bajau のカヌーのタイプと同じではない（Doran 1981）。伝統的に Bajau は年間の乾期中，家族とともに家舟に乗って沿岸沿いに漁労生活を営むものの，突如，遠洋航海型のカヌーに乗り換え，果てしない航海に赴く，にわかに信じがたいことである。しかし，なお Bajau にこだわるならば，Vezo にオーストロネシア系（とくにマライ・ポリネシア系）魚名が多く残っていて当然に思える。Vezo の「捕獲された魚種資料」数十項目（飯田 2008）のうちその可能性があるのは，*tanggiRi ／ *tangiRi ヨコシマサワラ属（*Scomberomorus* spp.）＞ dangiry ヒメツバメウオ（*Monodactylis argenteus*），*bakuku タイ科（Sparidae）の種類＞ vahoho ナンヨウチヌ（*Acanthopagus berda*），*lemaq（魚名未詳）＞ leme キュウセン属（*Halichoeres* spp.），*bu(n)tanaq ヒラニザ（*Acanthurus mata*）＞ botagna モヨウフグ属（*Arothron* sp.），*kuRita タコ＞ horita タコ，が指摘できるぐらいで，植物名の維持状況に比べ決して多いとはいえない。またかりに，Vezo がマダガスカルでインドネシアの出自名を継承する唯一の民族であったとしても，マダガスカルにおいて他の集団から完全に孤立した民族史をもつのではないということである。これはマダガスカル

の他の集団についても同じことがいえ，現在のインドネシア各地の民族と文化的な類似点はあるものの，インドネシアのどの集団がマダガスカルのどの集団と対応するのかを厳密には特定できない。マダガスカルの民族は，全体としてあらたな文化複合を形成しているからである。

本稿は，前稿を承け，前稿で見落とした資料およびその後の資料，文献によってマダガスカルにおけるオーストロネシア語起源の植物名称を追補し，また前稿で記した項目を補訂するものである。現在，オーストロネシア語族というとき，台湾の言語を対応例として含むことが一般であるが，本稿で取り扱っているのは，その下位のマライ・ポリネシア語派が中心であることをお断りする。ただし，台湾とフィリピンの植物分布には相当の相違がある一方，台湾の植物名称はフィリピン系の語彙と共通性が少ない（鹿野 1946）ことも，本稿の研究対象に含め得なかったことと関係する。前稿以降，刊行された文献として，マダガスカル関係では Boiteau（1999），フィリピン関係では Madulid（2001）が掲げられた項目と地方語を含む質，量の点で従来の類書のレベルを凌駕するが，前者は著者の語源解釈に注意が必要，後者は植物の説明がないのはともかく（したがって依然として Merrill（1923–1926）の重要性は変わらない），表記にタガログ語の正書法に伴うアクセント記号を省略しているため，語末母音（およびある条件下の語中母音）の後に現れる声門閉鎖音 [ʔ] の有無を別途，確認する必要がある。

以下の項目において（D）（B）（V）（W）と記すのは，それぞれ，Dempwolff（1938），Blust（1980–1989; 1988），Verheijen（1984），Wolff（1994）が再構成した植物名称の祖語形を表すが，それらの項目にマダガスカルの言語が例示されていないものについて，本稿ではマダガスカル方言形をボールド体で示す。また，前稿に示したにもかかわらず，本稿で取り上げ補訂した項目にはその前に + を付す。（D）（B）（V）（W）の後の祖語形は著者の修正形である。また著者が本稿にあらたに追補した祖語形の項目はボールド表記とする。祖語形の後の（S）はサンスクリット語からの借用語であることを表す。祖語形を再建する祖語音は，Dempwolff 方式を改めた Dyen の書き換えが現在一般的に行われ（このほうがキーボード操作が容易という理由もある），本稿も前稿同様，Dyen 式で記す（Dyen 1971）。Wolff の表記も Dyen 式に書き改める。祖語音の e は常に [ə] を表す。さらに著者は，Dyen 式では n のうえにティルド ñ [ɲ]，エング ŋ を ny, ng と書く。ただし，マダガスカルでは ng は [ŋg] と発音されるが，[ŋ] は単独で音素とはならない。なお，gn と書かれた [ɲ] をもつ方言がある。

マダガスカルの言語は，祖語音に対し「多重対応」をする。簡単にいえば，一つの

祖語音に対しいくつかの変化音が現れる。この現象を説明するために Dempwolff はとくに語末の規則音に対する不規則音の設定，また語頭・語中では前鼻音化の導入によって，それを解釈しようとした。一方，Adelaar（1989; 1994; 1995）は，上述したように，後の Malay その他の言語の借用語という解釈に基づき不規則音を説明しようとした。それらの具体については，該当する項目で言及する。とくに，Malay がコモロ諸島の Comoran（バントゥ語族の一つ）と接触する前，した後のような区別を設けているが（1989），本稿では一括して借用語とする。ただし，Malay との対応がない場合，Malay 系言語と称する。

マダガスカルの植物の和名については湯浅（1995）によったが，まだ和名のないものがほとんどで科名だけ記すに留めたものも多い。その他，和名はコーナー・渡辺（1969），熱帯植物研究会（1996）に従った。科名については，その後，修正があったもの，例えばアオギリ科がアオイ科に包括されたような例もある。なお，＞は「変化する」，スラッシュ（／）は「または」，コロン（：）は「対応する」を意味し，植物名以外は「　」でくくる。また現在，複合語ないし派生語となり祖語形と無関係の要素は ( ) でくくる。最初に * の付いた祖語形の [ ] はその音が未確定であること，( ) は二者択一を意味する。

それぞれの言語（方言）名には，次のような略語（ないしそのまま）を用いる。ただし，言語（方言）間の名称の不一致がないかぎり，原則的にフィリピンは Tagalog, Bisayan，マダガスカルは Merina を示すに留める。いずれも，現行の正書法に従っているが，マダガスカルは，母音 o，語末の -y はそれぞれ [u], [i] と発音され，tr, dr はそり舌音の [t], [d] を表す（tr, dr はトラ，ドラなどとカナ表記され，発音されることもあるが字音読みである）。

フィリピン：

Bagobo (Bgb.)：Batangan (Bng.)：Bikol (Bik.)：Bisayan (Bis.)：Bisayan, Cebu (BisC.)：Bisayan, Hiligaynon (BisHl.)：Bisayan, Panay (BisPn.)：Bisayan, Samar-Leyte (BisSL.)：Bontok (Bon.)：Bukidnon (Bkd.)：Gaddang (Gad.)：Hanunuo (Han.)：Ibanag (Ibg.)：Ifugao (Ifg.)：Igorot (Igt.)：Ilokano (Ilk.)：Kalagan (Kal.)：Kankanay (Knk.)：Kapampangan (Kpm.)：Maguindanao (Mgd.)：Manobo (Mbo.)：Many languages (ManyLgs.)：Maranaw (Mar.)：Negrito (Neg.)：Pangasinan (Png.)：Sambal (Sbl.)：Sambal, Pinatubo (SblPn.)：Subanon (Sub.)：Tagabili (Tbl.)：Tagalog (Tag.)：Tagbanwa (Tbw.)：Tasaday (Tas.)：Tausug (Tsg.)。

インドネシア・マレーシア：

Iban (Iban)：Javanese (Jav.)：Malay (Mal.)：Menatawaian (Ment.)：Minahasan (Minah.)：Minangkabauan (Mink.)：Ngaju-Dayak (NgD.)：Old Javanese (OJ.)：Sundanese (Sun.)：Toba-Batak (TB.)。

マダガスカル：

Antandroy (Tandr.)：Antankarana (Tank.)：Antanosy (Tanosy)：Bara (Bara)：Betsileo (Betsil.)：Betsimisaraka (Betsim.)：Bezanozano (Bezan.)：Mahafaly (Mahaf.)：Malagasy (MLG)：Merina (Mer.)：Provincial (Prov.)：Sakalava (Sak.)：Sihanaka (Sihan.)：Tanala (Tan.)：Tanosy (Tanosy)：Tsimihety (Tsim.)。

オセアニア：

Fijian (Fij.)：Samoan (Sam.)。

3　オーストロネシア系由来の植物名称リスト

01）*amaRa（B1980）「樹木の一種」／（W）ケガキ属（*Diospyros* spp.）カキノキ科＞ mara(-keluang) (Mal.) ツクバネウルシの一種（*Melanorrhoea curtisii*）ウルシ科：amaga (Bis.) ／ amago(-n) (Tag.) ケガキ（*D. discolor*）：**(man-)amora** (Mer.) ケガキの一種（*D. gracilipes*）：**(man-)amora** (Sak.) センダン科（Meliaceae）の一種（*Malleastrum gracile*）。

Tagalog, Merina でケガキを意味するので，（W）と同様，祖語形もそれに従う。マダガスカル方言の -r- は，この言葉が Malay の借用語であるとみなす（Adelaar 1994）。また末尾第二音節 -o- は不規則である。

02）*anabu（B1983–1984/W）トゲアオイモドキ（*Abroma augusta*）アオイ科＞ anabo (Tag.)：anabo (Ilk.) アオイ科（Malvaceae）の一種（*Malachra capitata*）：**adabo** (Sak., Bara) イチジク属の一種（*Ficus cocculifolia*）クワ科。

マダガスカルの -b- は，この言葉が Malay 系言語からの借用語であるとみなす（Adelaar 1994）。-n- は不規則的変化である。（B1983–1984）は注記で MLG として adabo を示しているが，Merina に該当する言葉はない。

03）***antak** マメ科（Leguminosae）の種類＞ antak (Bon., Tbw.) ハマササゲの一種（*Vigna sesquipedalis*）マメ科：antak (SblPn.) アオイマメ（*Phaseolus lunatus*）マメ科：antaka (Mahaf., Tandr., Tanosy) フジマメ（*Dolichos lablab*）マメ科：antaka (Betsim.) シカクマメの一種（*Psophocarpus palustris*）マメ科。

いずれも「つる植物」で，Antandroy では antaky といい（湯浅ほか 2000），葉がジンマシンの薬となる。

04）***api** ヒルギダマシ属（*Avicennia* spp.）クマツヅラ科＞ api-api (Mal., TB.)：api-api (Tag.)：afi-afy (Sak.)。

樹皮にタンニンを含み，薬用，魚毒に利用される。現在，Malay で api は「火」をいうが，この祖語形は *apuy で apoy (Tag.)：afo (Mer.) のように変化し，api と同音異義になったにすぎない。

05）***apit** アオイ科（Malvaceae）の種類＞ apit (Igt.) マライガマズミの一種（*Viburnum galaberrimum*）スイカツラ科：apit (Ilk.) ブラジルワタ（*Gossypium barbadense*）アオイ科：afitra (Tsim.) ドンベヤ属の一種（*Dombeya venosa*）アオイ科。

afitra は繊維が縄作りに利用される。Malay の apit は「布巻棒」‘cloth beam’ で植物名称ではない。道具名へと意味変化したものか。

06）***(em)bacang** ウママンゴウ（*Mangifera foetica*）ウルシ科 ＞ bacang ／ embacang (Mal.)：embe (Sak.) マンゴウ（*M. indica*）ウルシ科。

07）***bagaw**（植物名未詳）＞ bagau (Mal.) トウエンソウ科（Xyridaceae）の一種（*Xyris indica*）：bagaw (Tag.) カワラケツメイ属の一種（*Senna timoriensis*）マメ科：vaho ／ vaho(-ha) (Sak.) マメ科（Leguminosae）の一種（*Crotolaria grevei*）。

トウエンソウは草本，カワラケツメイは小木で，前者は皮膚病薬などに，後者は葉から下剤となるセンナ（旃那）が採れる。マダガスカルの草本 vaho は用途不明であるが，薬効による共通性か。語末の -ha については，21）*barik，36）*kabu，73）*sugi を参照せよ。また *bakung ハマユウに由来する vaho ／ vahona の vaho とは同音異義になる（崎山 1991）。

08）***bagu** グネモン属の一種（*Gnetum* sp.）グネツム科＞ bagu (Mal.) ヒメグネモン（*G. brunnonianum*）：bago (ManyLgs.) ／ bagu (Bng.) ／ bago(-sili) (BisC.) グネモンノキ（*G. gnemon*）：vaho (Sak.) タヌキマメ属の一種（*Crotalaria grevei*）マメ科。

グネモンは小木，タヌキマメは草本，いずれも葉，種子が食用，靱皮繊維から網糸が作られる。なお，*bakung ハマユウ（*Crinum asaiticum*）に由来するアロエの一種 vaho (Bara) は語尾 *-ng が落ちて開音節化した形で語源が異なる（崎山 1991）。

09）***bakak** ソルガムの一種（*Sorghum* sp.）イネ科＞ bakko-bakko ／ bakku (Ifg.) ソルガムの一種（*S. nitidum*）：bakaka (Sak., Bara) ソルガムの一種（*S. brevicarinatum*／*S. halepense* ／ *S. verticilliflorum*）。

ソルガムは，熱帯アフリカ起源であるが，中国へはインド経由で西暦 4 世紀以前六朝時代に伝わっていたとされる（農林省熱帯農業研究センター 1975）。その一種がマライ・ポリネシア原文化に入ったが，現在，この形は局地的にしか残らない。マダガスカルでもバントゥ祖語の *-pemba ミレットを借用した femba (Tank.) ／ ampemba (Sak., Tandr.) ／ ampemby (Mer.) が一般的名称となる。（Flacourt 1658）には ampembe ‘le grand mil’ がすでに記録されている。マダガスカルの b- は，この言葉が Malay 系言語からの借用語であるとみなす（Adelaar 1994）。

10）*bangkal（B1989）／ *bengkal（W）タマバナノキ属(*Nauclea* spp.)アカネ科／*ba(ng)kal ／ *ma(ng)kal ＞ bengkal ／ mengkal (Mal.) タマバナノキの一種（*N. purpurascens*）：bangkal (Tag.) メンカル（*N. junghuhnii*）：bakal ／ bankal (BisPn.) バンカル（*N. orientalis*）：**bakaly** (Bara) ヤシ科（Palmae）の一種（*Ravenea rivularis*）。

タマバナノキは中高木で耐久性のある木材として重要，マダガスカルのヤシ科はラフィアヤシ（*Raphia ruffia*）の近縁種（Cabanis et al. 1970）で，良質の木材となる。（W）形の第一音節母音はフィリピン形の説明ができない。また（B）（W）ともに語中の -ng- の扱いが適切でない。マダガスカル形の語頭の b- および語末の *-l に由来する -l-（規則的変化は -na）は，この言葉が Malay の借用語であるとみなす（Adelaar 1994）。ただし，-na については，23）*bintanguR を参照せよ。

11）***bakik** コショウ科（Piperaceae）の種類＞ bakik (Mal., Iban) ヒハツの一種（*Piper chaba*）コショウ科：vahy (Mer.)「つる植物」：vahi(-tamboro) (Betsim.) コショウ属の一種（*P.* sp.）。

*bakik の語末子音は Betsimisaraka で落ち，後の tamboro は不純形で tambolo が本来の形である。この語については 78）***ta(m)bula** 参照せよ。

12）*balaw（B1980/W）「材木用樹木」＞ balau (Mal.) サラノキの一種（*Shorea materialis*）フタバガキ科：balaw (BisPn., Tag.) オオミフタバガキ（*Dipterocarpus grandiflorus*）フタバガキ科：**valo** (Betsim.) ドンベヤ属の一種（*Dombeya valou*）アオイ科。

樹皮の繊維は強靱で縄作り用にされる。**valo** の種小名は祖語形にさかのぼる。

13）*balija（D）「緯打具」／ *baliDa ／ *baliga (by-form) ＞ belira (Mal.)：balida (NgD.)：baliga (TB.)：balila (Tag.)：**valiha** (Betsim.)「竹刀」，アナナシタケ（バンス）（*Dendrocalamus strictus*）イネ科：**valiha** (Mer.) ／ **vadiha** (Prov.)「竹筒琴」：**valiha** (Sak.)「竹，竹筒琴」。

この祖語形は植物名称ではないが，マダガスカルにおいて連鎖的に発生した意

味変化を示す例として重要である。（D）の祖語形からマダガスカルは *valira ／ *valitra と変化すべきであるが，語中子音が不規則となる。またこの形から規則的には Malay *belida，Ngaju-Dayak *balira と変化すべきもの。（D）の *-j- という再構音に不確定的要素があるためである。Malay, Ngaju-Dayak, Tagalog は *baliDa から規則的に説明でき，また *baliga という二次形‘by-form’から Toba-Batak，マダガスカル方言形が規則的に説明できる。

織機に用いられる緯打具（刀杼）‘beater-in’は木刀の形をしている。マダガスカルでアナナシタケは，節間が長く堅いことから鉄刀が普及する前は伐採刀として利用され，その形から antsi-valiha「竹刀」とも呼ばれた（Boiteau 1998）。一方，節間の長いこのタケを利用して作られた，おもに Merina の楽器「竹筒琴」は，現在，この竹名で呼ばれていることになる。ただし，竹筒琴の歴史は古く，西部マライ・ポリネシア語派の民族楽器にさかのぼるが，現在，東南アジア内陸部，インドネシア，フィリピンのいずれも僻地に残るのみで，またその名称にも共通性が見られないのは，このマダガスカルの場合と同様に，あらたな呼び名へと置き換わっていったためである。

14）***balik** コンロンカ属（*Mussaenda* spp.）アカネ科＞ balik (Mal.) コンロンカ属：balik(-arap) (Tag.) コンロンカ属の一種（*M. philippica*）：bali(-lamok) (Ilk.) コンロンカ属の一種（*M. philippica*）：vali(-andro) (Mahaf.) センダン科（Meliaceae）の一種（*Astrotrichilia valiandro*）：vali(-andro) (Tandr.) センダン科（Meliaceae）の一種（*Quivisianthe papinae*）：vali(-rano) (Betsim.) サキシマハマボウ（*Thespesia populnea*）アオイ科：vali(-soa) (Sak.) クサトベラの一種（*Scaevola plumieri*）クサトベラ科。

この祖語形は，マダガスカルで規則的には *valika と変化するはずであるが，開音節化した *vali- が複合語の要素として維持されている。-andro は「日中」，-rano は「水」，-soa は「良い」の意味である。コンロンカへの比喩で命名している場合が多いのであろう，クサトベラ，サキシマハマボウは海岸の小木，庭木とされるほか樹皮，花が薬用，染料になる。センダン科の vali-andro はそのまま種小名にもなっている。Antandroy はセンダン科の葉を煎じジンマシンの薬にする（湯浅ほか 2000）。なお，60）***piqay** を参照せよ。

15）***balun** ジュラン属（*Aglaia* spp.）＞ balun (Mal.) ジュラン属の一種（*A. griffithii*）センダン科／クリムノキの一種（*Dysoxylim cauliflorum*）センダン科：balon (Png.) バユール（*Pterospermum diversifolium*）アオイ科：valona ／ valotra (Tsim.) アカネ

科（Rubiaceae）の一種（*Gyrostipula foveolata*）：valotra (Betsim.) ドンベヤ属の一種（*Dombeya lucida*）アオイ科。

この祖語形は，*bayuR（B1980）バユールの一種（*P.* sp.）アオイ科（＞ bayur (Mal.)：bayok (Tag.) ほか，マダガスカルには伝わらない）と，とくにフィリピンにおいて混同が起こっている。バユール，クリムノキともに建材，家具材，薬用として多用な高木である。マダガスカルの -na は正規の変化であるが，-tra としばしば交替することについて，そり舌音化することによって話者が声を強め王族のような救霊者に対して物言うため（Boiteau 1999）と説明する。これが事実とすれば，この現象は共時的な交替‘alternation’の問題であって，Adelaar のいう時期的な借用語の更新‘innovation’の話ではない。

16）*banaR（V）／ *banyaR（W）サンキライ属（*Smilax* spp.）ユリ科＞ banar (Mal.)：banag (Tag.)：**vanaka** (Betsim., Tan.) モニミヤ科（Monimiaceae）の一種（*Tambourissa purpurea*）。

いずれも小木，つる木であるが，vanaka は実に強い毒性があり，薬用として共通するのであろう。なお，**vanaka** における *-R ＞ -ka という不規則的変化は，*pasiR「砂」＞ fasika「砂」でも起こっている。

17）***banuk**（植物名未詳）＞ banuk (Mal.) ハネタマカツラ（*Sarcolobus globosus*）ガガイモ科／サンキライ属の一種（*Smilax barbata*）ユリ科：banug (Bgb.) サンキライ属の一種（*S. williamsii*）：banug (BisC) フトモモ属の一種（*Syzygium luzonense*）フトモモ科：banug (Tbw.) ベンサムマンゴスチン（*Garcinia benthamii*）オトギリソウ科：vanoka (Bezan.) イチジク属の一種（*Ficus pyrifolia*）クワ科。

「つる植物」や高木を含み原義を特定できない。

18）*banu[w]ang（D）／ *binuwang（W）「樹木の一種」／ *minuwang ビヌアン（*Octomeles sumatrana*）ダティスカ科＞ minuang (Mal.)：ビヌアン（*O. sumatrana*）：binuang (Iban) ビヌアンの一種（*O.* sp.）：binuwang (Tag.) シダレオオサルスベリ（*Duabanga moluccana*）ハマザクロ科／グバス（*Endospermum peltatum*）トウダイグサ科：**vinoana** ／ **vinoa** (Sak., Betsim.) アオイ科（Sterculiaceae）の一種（*Hildegardia erythrosiphon*）。

マレー半島では *binuwang ＞ benuang がピンポン属の一種（*Sterculia alata*）アオイ科を意味するが，minuang とは二重語になる。ピンポン樹がインドから日陰樹として移植されたための混乱か（Burkill 1966）。なお，（D）の第一音節母音は不適当である。フィリピンの地方語では *sanay がビヌアンを意味することもあ

る。67）***sanay** を参照せよ。

19）***barangan**「果実利用の樹種」＞berangan (Mal.) インドグリ（*Castanopsis argentea*）ブナ科：balangan(-an)　(BisPn.) タンカラック（*Litsea　glutinosa*）クスノキ科：varana (Tsim.) ブニノキの一種（*Antidesma madagascariensis*）トウダイグサ科。

いずれも小高木，果実が賞味される点で共通し，タンカラックは種子から搾油もされる。マダガスカルでは木の実から果実酒が作られる。

20）+*ba[r]i（D）「調理したコメ」＞ bari (NgD.)：vary (Mer.) イネ。

この祖語形はイネを意味しない。vary　(Mer.) はイネを意味する padi　(Mal.), palay　(Tag.) などと同語源ではあり得ないことを，（D）は音韻変化に基づき示した。これらイネの祖語形となる *pajay のマダガスカルにおける継承形 *fary はサトウキビ（イネ科）を意味する。*pajay イネの意味的連関の消失は，オーストロネシア祖語の *beRas（D）「コメ」，*imay（D）／ *Semay（B1988）「飯」，ZaRami（B1988）「稲茎」，*qeCa（B1988）「籾殻」などイネ関連の語彙がマダガスカルにまったく伝わって（残って？）いないこととも関係があろう。干飯を携えて旅をしたことは，日本でも奈良時代の文献から知られるが，カヌーによるマダガスカルへの長い航海にも同様の保存食を携行したことは明らかであろう。しかし，この言葉が現在，イネを意味することに唐突な感があるのも事実である。ただし，この意味変化から分かるのは，もっとも初期の移住者たちが，かりに播種用の稲籾を持っていたとしても，その育成に成功しなかったということである。*pajay に由来する語彙がイネ以外の植物に対して残されたことがそれを物語る。マダガスカルにおける先住の移住者とみなされる Vazimba はすでに稲作を行っていたという伝承はあるけれども，vary が音形では南インドやスリランカの南部ドラヴィダ語族（Tamil, Malayalam, Telugu など）の vari（イネ）に近似する点で，インドネシアから引き続き行われた渡航者がこの地域を経由し稲籾とともに vari という言葉ももたらしたか，あるいはむしろこの可能性が強いが，ドラヴィダ語族がマダガスカルに vari をもって渡来したかのどちかが無視できなくなったように思われる。ただし，vari は現代語であるから，方法論として比較言語学的にドラヴィダ祖語を提示して議論する必要がある。これは今後の課題であろう。マダガスカルにおける Bara の蹄耕，Bezanozano の水田耕作法などが，南インド，スリランカのものに酷似するという指摘もある（高谷ほか 1989）。東南アジア島嶼部における Tamil 人の往来は，フィリピンでは西暦 10–16 世紀の間（Francisco 1971），インドネシアはスマトラで西暦 13，14 世紀の Tamil 語碑文が少数，発見

されている（Casparis 1975）ことも，あわせ考えるべきであろう。

21）***barik**「薬用植物の一種」＞ barik (Mal.) ブニノキの一種（*Antidesma leucocladon*）トウダイグサ科：balik (BisPn.) ダイフウシ属の一種（*Hydnocarpus cauliflora*）アオイ科：balik (Sub., Tsg.) レイシ（*Litchi chinensis*）ムクロジ科：vari(-ha) (Bezan.) ／ varia(-hy) (Betsil.) ／ varia (Betsim.) リンドウ科（Gentianaceae）の一種（*Anthocleista madagascariensis*）。

種子，樹皮が薬用にされ，マダガスカルでは吐瀉剤として使用される。Malay の和名は 26）*buReney ／ *beRuney を参照せよ。オーストロネシア祖語形の語末子音はマダガスカルの言語における開音節化現象のため，*-k は添加母音を伴って -ka に規則的変化する場合と落とす場合とがある。***barik** は後者の例で vari に開音節化したあと，あらたに起源不明の語尾 -ha がついたと考えられる。同じような例は，Sakalava の fopo ／ fompo-ha イチジク属の一種（*Ficus polyphlebia*）クワ科にも認められる。マダガスカル語の語末におけるこのような現象を（D）は「不正確な類推」‘irrige Analogien’によるとみなす。この現象については，07）***bagaw**，36）*kabu, 73）***sugi** も参照せよ。

22）***barunggay** ワサビノキ科（Moringaceae）＞ barunggai (TB.) ／ marunggai (Mink.) ／ remunggai (Mal.) ワサビノキ（*Moringa pterygosperma* Gaerthn.）ワサビノキ科：balunggay ／ balungay (Bis.) ワサビノキ（*M. oleifera* Lam.）：varongy (Tank.) マルバタモの一種（*Cryptocarya ocoteaefolia*）クスノキ科：varongy (Sak.) バロンジ属の一種（*Ocotea racemosa*）クスノキ科：varongy (Mer.) バロンジ属の一種（*O. perforata*）。

Malay の語頭部分には，変則的な変化（音韻取替）がみられる。ワサビノキは小木，根・葉は野菜，香辛料に，材からは染料，樹皮は縄作りと多用される。バロンジは中木，樹皮に匂いがあり，虫食い，腐敗に強く，高級木材とされる。現在，マダガスカルでワサビノキは，maro-sirana ／ maro-serana (Sak., Mahaf.)「多くの港 ?!」（Boiteau 1999）と呼ぶ。

23）+*bintanguR ／ bitaquR（B1988/V）テリハボク属（*Calophyllum* spp.）オトギリソウ科＞ bintangur (Mal., Iban)：bitangol (BisPn., Tag.)：vintanina (Mer.) ／ vintano (Tank.)：fetau (Sam.)。

Merina の語末の -na は不規則であるが，このような対応例は多く，一括して Malay の借用語とみなす（Adelaar 1989）のは安易な解釈ではないか。むしろ，一旦，開音節化したあとにオーストロネシア祖語の属格接尾辞 *-na「その」が付

いた可能性を考えるほうが語源としてより合理的に説明できると思われる。なお，35）*gelam, 44）***kasay**, 48）***kusa**, 52）*medang および 82）*[t]enge[r] を参照せよ。

24）+*bu(n)tun（D）／ *butun（B1988/W）／ *bu(n)tung サガリバナ属（*Barringtonia* spp.）サガリバナ科＞ butun (Jav., Sun)：botong (Bis., Tag.)：vontona ／ vontana ／ bontona (Sak..) ディギタータ・バオバブ（*Adansonia digitata*）パンヤ科：bontona ／ bontana (Sak.) マダガスカリエンシス・バオバブ（*A. madagascariensis*）／ザー・バオバブ（*A.. za*）：vutu (Fij.) ／ futu (Sam.) サガリバナ属。

サガリバナ属を Malay は butun でなく putat と言い，（D/W）には誤解がある（Burkill 1966）。*putat については崎山（1991）を参照せよ。しかし，（D）の *bu(n)tun の項目には butun (Jav., Mal.) に対応する Merina の bontona バオバブ‘Affenbrotbaum’も掲げられている。科はもとより樹形が大きく異なるこの比較に，著者はかねてから疑心暗鬼であった。同じ理由のせいかどうか明かではないが，（W）は対応する語に MLG を掲げていない。しかし，白またはピンク色の多数の雄しべをもった刷毛状の花は，サガリバナとバオバブで非常によく似ていて，その間に類推作用が働いたのである。（D）がそれを分かって比較したのかどうか確認できないが，湯浅教授のご教唆により，その謎が解けた。

マダガスカルの bontona の b- は，この言葉が Malay 系言語からの借用語であるとみなす（Adelaar 1994）。ただし，オーストロネシア祖語形にはサガリバナ属と同音異義の *bu(n)tun（D）「堆積」があり，Merina では vontona「真ん中」／ vonto「膨らみ」へと意味変化する。この言葉 bontona（Adelaar（1994）によれば Malay の借用語）を幹が膨らみをもったずん胴のバオバブ，とくにマダガスカリエンシスやザーに対し Sakalava が適用したことも十分に考えられる。

Sakalava はずんぐり型のディギタータ（近藤 1997）も vontana と呼ぶが，これは裾広がりの太い枝が目立つ形（近藤 1997）で vonoa, sefo, ringy という別称もあり（Sakalava は vonoa をアルバ・バオバブ（*A. alba*），スアレゼンシス・バオバブ（*A. suarezensis*）に，ringy をルブロスティパ・バオバブ（*A. rubrostipa*）にも区別せず用いる）（Boiteau 1999），サガリバナ属への比喩と樹形の膨らみから音韻的合流が起ったこともあり得る。結果として，学名の違いと民俗呼称とは一致しない。これは，Antankarana の場合でも同じである。なお，ルブロスティパ・バオバブはフニィ・バオバブ（*A. fony*）とも呼ばれるが，その語源およびグランディディエリ・バオバブ（*A. grandidieri*）の命名は，崎山（1999）を参照せよ。

25）*bunut（D/B1980）「樹木の一種」／ *bunut（W）ノボタン属の一種（*Pternandra coerulescens*）ノボタン科＞ bunut (Mal., Iban) ／ bunot (NgD.) テリハボク属（*Calophyllum* spp.）オトギリソウ科：bunot-bunot (Tag.) ヒロハノジアオイ（*Melochia umbellata*）アオイ科：bunot-bunot (Tbw.) イガタマノキ（*Commersonia bartramia*）アオイ科：**vonotra** (Tsim., Sihan.) ヤシ科（Palmae）の種類。

テリハボクは板材，ヒロハノジアオイは靱皮を縄，マダガスカルでは床材にされるヤシ科で，用途は多用であるが，原義を特定できない。（W）は Malay, Iban のみに基づいて原義を決めている。（B1989）では *bunut「ココナツの外皮」を別項目に掲げているが，この樹木の一種とは同音異義になる。（D）が本項目 *bunut の変化例にあげている bunot (Tag.)「ココナツの殻」は誤解で，（B1989）からの変化形である。

26）*buReney ／ *beRuney（W）／ *buRunyay ／ *binyay ブニノキ（*Antidesma bunius*）トウダイグサ科＞ berunai ／ buni (Mal.)：wuni (Jav.)：bugnay ／ bignai (Tag., Bis.)：**vona** (Sak.) ブニノキの一種（*A. petiolare*）トウダイグサ科。

（W）の語末二重母音は不適当である。マダガスカルで語末母音が不規則的な -a に変化したのは，*bunga「花」に由来する vony「花」との混同を回避したためか。

27）***campaka**（S）キンコウボク（*Michelia champaca*）モクレン科＞ cempaka (Mal.)：campaka (OJ.)：sampaka ／ tsampaka (Tag.)：sampahy (Sak.) ／ sampaho (Mer.) クロトン属の一種（*Croton perrieri*）トウダイグサ科。

祖語形はサンスクリット語 campaka- の借用語である（Gonda 1973）。チャンパカ油は香油として有名であるが，種子などの薬用による共通性か。マダガスカルでは *c- は ts- に規則的変化をするが，この例は，*cirit「漏らす」＞ siritra「尿」，*cuping「耳翼」＞ sufina「耳」のような例外的変化に属する。

28）+*damaR（D）「樹脂」＞ damar (Mal.) マニラコーパルノキ（*Agathis dammara*）ナンヨウスギ科／カンラン属（*Canarium* spp.）カンラン科／チェンガルの一種（*Balanocarpus curtisii*）フタバガキ科／サラノキ属（*Shorea* spp.）フタバガキ科ほか：damag (Tag.)「（松明を燃やす刻＝）夜通し」：ramy (Mer.) ／ (a-)ramy (Bara, Betsil., Betsim., Tan.) カンラン属の一種（*C. boivini*）：rāma (Fij.)「照らす」：lama (Sam.) ククイノキ（*Aleurites moluccana*）トウダイグサ科，「松明」。

（D）の意味は不適当で原義は樹脂の採れる樹木である。Merina の ramy も樹脂が原義ではない。ramy は *damaR の語末子音が落ちたあと，*dama は 32）

***ganda**, 65）*saga, 87）*zawa からと同じ変則的な語末の母音変化に従っている。このような変化は，ボルネオ（カリマンタン）島の言語的古層（基層）によって発生したとみる Aichele 説（未刊）を（D）は引用している。語末の *-a が -y に変化する現象は，実際に，島南東部のバリト川以東に分布する Ma'anyan の語末 -ä／-e と対応する（Dahl 1951）。ramy はカヌー材となるほか，Betsileo，Sakalava では樹脂のエレミを魔よけや薬用に用いる。

29）***[d/l/r]imas** パンノキ属の一種（*Artocarpus bracteata*）クワ科＞ dimas (Kpm.) ／ dima (BisHl.) ／ rimas (ManyLgs.) パンノキ（*A. altilis* Fosb.）：lema ／ rima (Betsim.) パンノキ（*A. incisus* L.f.）クワ科。

フィリピンの rimas は不純形で借用語であろう。またマダガスカルの lema は古語で，マダガスカル祖語の indonésien：rima (?) にさかのぼる（Boiteau 1999）というが，そのような形は知られていない。この祖語形にミクロネシアの西部マライ・ポリネシア語派 Chamorro の lemmai ／ lemai ／ rimae パンノキ（*A. altilis*）も由来すると考えられる。パンノキ属については有核・無核の区別を含め，この他にもいくつかの名称が知られている。パンノキは重要食種として東インドネシアからオセアニアにかけ複雑に分布しており，Chamorro の dokdok（*A. mariannensis*）は有核の野生種である（Barrau 1961）。フィリピンの rimas は無核で，移入種であろう（Merrill 1923）という。***[d/l/r]imas** はマライ・ポリネシア語派の周辺に残るもっとも古い形とみてよいだろう。ただし，語頭子音の種類を歴史的にいまだ特定できない。

30）*dunung（B1988）／ *dungun サキシマスオウノキ（*Heritiera littoralis*）アオイ科＞ dungun (Mal., Iban)：dungon (Tag.)：**rono** ／ **ronona** (Betsim.)

（B）の祖語形には誤りがある。

31）*gamat（B1986）「染料採取植物」＞ gamat (Mal.) ブドウ科（Vitaceae）の一種（*Pterisanthes cissoides*）：gamat (TB, Iban) ツユクサモドキ（*Cyanotis cristata*）ツユクサ科：gamat (Tag.)「とげのある草の一種」：**hamatra** (Mahaf.) ユーフォルビア・ステノクラーダ（*Euphorbia stenoclada*）トウダイグサ科：**hamatra** (Sak.) マメ（Leguminosae）の一種（*Aeschynomene sensitiva*）。

染料だけでなく gamat (Mal.) は腫れ止め，**hamatra** (Sak.) は煎じて下剤にされる。

32）***ganda**（S）ガンダルサ（*Gendarussa vulgaris*）キツネノゴマ科＞ ganda (Mal.) ガンダルサ：ganda (Minah.) ネギ属の一種（*Allium uliginosum*）ユリ科：ganda (Bis.)

ニラ（*A. tuberosum*）：ganda (Igt.) サニギクの一種（*Vernonia* sp.）キク科：ganda (Sbl.) ガジュツ（*Curcuma zedoaria*）ショウガ科：handy (Tandr.) ／ andy (Sak., Mahaf.) センダン科（Meliaceae）の一種（*Neobeguea mahafalensis*）。

祖語形はサンスクリット語 gandha-「匂い，香り」の借用語である（Gonda 1973）。ガンダルサは小木で没薬‘myrrh’の代用になり，薬用としても多用される。フィリピンではガジュツのように「匂う」草本からユリ科の「臭う」草本まで広範囲に変化している。Antandroy（その他，Sakalava，Mahafaly）は handy を hazo-lava「長い木」ともいい（湯浅ほか 2000），樹皮が非常に苦い。「長い木」というのは「槍」の古称で牛泥棒を警戒するため使用したのは，この苦みに特別の効能があると考えたためである（Boiteau 1999）。樹皮，葉を煎じ胃薬，精力剤とするほか，リューマチに効く。なお，マダガスカルの語末 -y は -a から変化したもので，28）*damaR を参照せよ。

33）+*garunggang（D/W）クラトキシロン属（*Cratoxylon* spp.）オトギリソウ科＞ geronggang ／ geronggong (Mal.) クラトキシロン（*C. arborescens*）／ garunggang (TB) ／ (pa-)guling(-in) (Tag.) ／ (pa-)guring(-on) (BisSL.) ／ (pa-)guring(-an) (Mgd.)：(pa-)nguling(-an) (Sub.) クラトキシロン属（*C.* spp.）：harongana ／ haronga (Mer.) ハルンガナ（*Haronga madagascariensis*）オトギリソウ科。

Madagascar の言語の Malay 借用語説をとる（Adelaar 1989）は，Merina の haronggana が 4 音節で長いことを根拠に Malay の geronggang の借用語とみなす。オーストロネシア祖語にさかのぼる 4 音節形は，マダガスカルにおいて 18）*banu[w]ang ＞ vinoana (Sak., Betsim.)，23）*bintanguR ＞ vintanina (Mer.)，37）***kalampuq** ＞ halampona (Mer.)，40）*kananga ＞ hananganana (Mer.)，55）*nibung ＞ anivona (Mer.) などのように植物名を含め珍しくない。語の長さをもって借用か否かの判断をすること自体，オーストロネシア比較言語学では方法論的になじまない。

34）***gasing** ツヅラフジ科（Menispermaceae）＞ gasing-gasing (Mal.) コマノヒモ（*Pericampylus glaucus*）／パレイラ（*Cissampelos pareira*）／ツヅラフジ属（*Tinospora* spp.）：gasing(-Zambales) (Tag.) クロトン属の一種（*Croton zambalensis*）トウダイグサ科：hasina (Mer.) リュウケツジュの一種（*Dracaena angustifolia*）リュウゼツラン科。

パレイラ，クロトンは薬用，根は魚毒，リュウケツジュも薬用（とくに解熱）となり，とくに Vazimba は悪霊を封じる聖木とみなしていた。

35）*gelam（D）「樹木の一種」／（W）カユプテ（*Melaleuca leucadendron*）フトモモ科＞ gelam (Mal., Jav., Iban) カユプテ：galam (NgD.)：**hela** (Tanosy) ／ **hela(-na)** (Tank.) オトギリソウ科（Guttiferae）の一種（*Psorospermum malifolium*）：**hela(-na)** (Betsim.) サルコラエナ科（Sarcolaenaceae）の一種（*Leptolaena multiflora*）。

サルコラエナ科はマダガスカルの固有科とする説とクラエナ科（Chlaenaceae）に含める説とがある（湯浅 1995）。原義は「樹木の一種」ではなく（W）のいうとおりカユプテであり，枝幹の色（Malay の kayu putih「白い木」）に基づく。コーナー・渡辺（1969）のカヤプテは誤記。カユプテは高木であるが，香油採取として利用，サルコラエナは花木である。マダガスカルの語末の -na は，23）*bintanguR を参照せよ。

36）*kabu（B1986/V/W）カポック（*Ceiba pentandra* Gaertn.）パンヤ科＞ kabu (Mal.) カポック（*Eriodendron anfractuosum* DC.）パンヤ科：habu-habu (TB.)：**havo(-ha)** (Mer., Betsim.) ／ **avo(-ha)** (Tank.) グニディヤ・ダングヤナ（*Gnidia danguyana*）ジンチョウゲ科。

havo(-ha) ／ **avo(-ha)** の語尾 -ha の起源は不明であるが，21）***barik**，73）***sugi** を参照せよ。Betsimisaraka は avoha-hafotra という複合語でもいうが，後部要素については 43）***kapur** を参照せよ。これらの植物の共通項は繊維採り用であろう。グニディヤ・ダングヤナは Antaimoro の紙すき材として有名である。

この祖語形の植物名となっているカッポクは，別の祖語形 *kapuk（D/B1986/W）にあり，kapuk (Mal.) ／ kapok (ManyLgs.) カポック：kapok (Bln., Ifg.) ブラジルワタ（*Gossypium barbadense*）アオイ科などとしてインドネシア，フィリピンに広く分布するが，借用語として広まった例も多いと考えられる。この形はマダガスカルには伝わっていない。（B1986/W）は *kabu と *kapuk を二重語‘doublet’とみるが問題であろう。現在，*kabu との間で意味的混乱がみられるけれども，元来，*kabu はカポックの木，*kapuk は蒴果の綿毛を指すような区別があったと推定される。オセアニア祖語形として *kapuk カポックを再構成し得る（Tryon 1994）かどうか，近年の借用語ならばともかく，オセアニアではミクロネシアの一部を除き，繊維素材を織る機具（単綜絖織機）がないこととも関連し（大林ほか 1990），大いに疑問である。なお，42）***kapiq** を参照せよ。

37）***kalampuq** センダン科（Meliaceae）の種類＞ kalampuh (Mal.) サントル（ケチャペ）の一種（*Sandricum* sp.）センダン科：kalampa (Ibg.) モモタマナ属の一種（*Terminalia nitens*）シクンシ科：halampo (Sak.) ハイビスカス属の一種（*Hibiscus*

macrogonus）アオイ科：halampona (Mer.) ドンベヤ属の一種（*Dombeya mollis*）アオイ科：halampona (Betsim.) オオバギ属の一種（*Macaranga* sp.）トウダイグサ科。

ケチャペは高木，モモタマナは中高木でいずれも葉が薬用，ドンベヤ，オオバギは小木だが，前者は棟木や屋根材，後者は葉が薬用にされる。この祖語形と似た *kalumpang（B1983–1984/V/W）ヤツデアオギリ（*Sterculia foetida*）アオイ科は kelumpang (Mal.) カツモウピンポン（*S. rubiginosa*）：kalumpang (Tag.) ヤツデアオギリ：kalupang (BisPn.) シマピンポン（*S. ceramica*）のように変化するが，マダガスカルにはこの形は伝わらない。しかし，***kalampuq** からの halampona (Mer.) や halampona (Betsim.) への横すべりは，建築，道具材としての樹木の多用な用途によるものであろう。

38）*kamangi（B1980/W）カミボウキ（*Ocimum sanctum*）シソ科＞ kemangi (Mal.) ヌスビトハギ属の一種（*Desmodium latifolium*）マメ科／ (medang-)kemangi ニクケイ属（*Cinnamomum* spp.）クスノキ科：kamangi (Tag.) ビロードサンシチの一種（*Crassocephalum crepidioides*）キク科：kamangi (BisPn.) ヒメボウキ（*O. basilicum*）シソ科：**hamany** (Sak.) トバ（デリス）属の一種（*Derris grevei*）マメ科。

いずれも強い匂いを発する点で共通するが，**hamany** は魚毒にも用いられる。

39）***kamut** マメ科（Leguminosae）の一種 ＞ kamut(-kabag) (Tag.) シタン属の一種（*Dalbergia ferruginea*）マメ科：kamot (Kpm.) コンナルス属の一種（*Connarus semidecandrus*）マメモドキ科：hamotra (Sak.) ／ hamotsy (Bara) マメ科の一種（*Aeschynomene sensitiva*）。

40）*kananga（B1983–1984/W）イランイラン（*Canangium odoratum*）バンレイシ科＞ kananga (OJ.)：kenanga (Mal.)：kananga (NgD.)：**hanana** ／ **hananganana** (Mer.)「芳香のする」

Merina の **hanana** ／ **hananganana** は植物名称の意味を失い，形容詞に変化してしまった。なお，晋の嵇含（Chi Han）によって永興元年（西暦 304 年）に書かれたと推定される『南方草木状』（現在の広州，海南島，ヴィエトナムの植物誌）に「橄欖」（kan-lan）と記載され，高さが数丈になる果類名称（小林 2003）は，この *kananga を借用したものであろう。ただし，橄欖はカンラン科に属し，同じ植物ではないが，両者とも芳香原料が得られる点で共通する。インドシナ半島の西部マライ・ポリネシア語派 Cham は kadanga という。ただし，イランイランはフィリピンの諸言語 ilang-ilang（英語，フランス語などに借用され ylang-ylang となる），マダガスカルでは Antankarana の ilagn-ilagny に見出せるが，この植物

が東南アジア島嶼部の原産であることを考えると，フィリピン形が古形を残していると考えられる。マダガスカルには，フランスが 1770 年，レユニオン島に導入して以降の移植と考えられるから（Cabanis et al. 1970），ilagn-ilagny はフランス語からの借用語でフィリピン形と直接の系統的関係はないことになる。

41）***kandis** フクギの一種（*Garcinia* sp.）オトギリソウ科＞ kandis (Mal., Iban) ／ handis (TB.) フクギ属（*G.* spp.）：kandiis (BisSL.) フクギの一種（*G. rubra*）：handatra (Mer.) ／ handatsy (Bara)「（未熟の果実のように）酸い」。

マダガスカルでは植物名称の意味を失い形容詞に変化した。Merina の語末 -tra は，*rasras「裂けた」＞ raratra「分かれた」のような例外的変化に属するが，この言葉は Malay の借用語であるとみなす（Adelaar 1989）。また末尾第二音節の -a- は逆行同化による変化であろう。

42）***kapiq** ワタ属（*Gossypium* spp.）アオイ科＞kapiah (Mink.) カポック（*Ceiba pentandra* Gaertn.）パンヤ科：kapih ／ kapeh (Kal.) ブラジルワタ（*G. barbadense*）アオイ科：hafitra (Mer.) ドンベヤ属（*Dombeya* spp.）アオイ科／イチジク属の一種（*Ficus baroni*）クワ科／ヤマアサ（*H. tiliaceus*）アオイ科。

この祖語形は，中国史料に現在のインドネシア地域の諸国（狼牙脩，婆伽達多，阿撤多）の産物としてワタを「吉貝」（ki-pei）または「古貝」（ku-pei）と記載しているものと対応し，二十四史のうち『梁書』（西暦 502–556 年）に現れる。マダガスカルでは樹皮から繊維が多く取れる植物の総称となる。Merina の hafitra の語末の -tra は *wawaq「広い」＞ vavatra「開いた」に類する例外的変化である。現在，マダガスカル諸方言で hafitra は hafotra と同義になり混乱が生じている。43）*kapur を参照せよ。一方，西部マライ・ポリネシア祖語形にはサンスクリット語 karpāsa-（プラークリット語 kappāsa-）シロバナワタ（*G. herbaceum*）を借用した（Gonda 1973）*kapas（D）木綿／ *kápes（Zorc 1994）というワタ系統の言葉があり，インドネシアでは kapas (Mal., Jav.) ワタ属，フィリピンでは kapas (Ilk., Sub.) ／ kapes (Knk.) ／ kapis (Knk.) ワタ属の一種，kapes (Png.) カポックのようにこの形が広く分布するが，マダガスカルには至っていない。（D）は *kapas を借用語とみていなかったため，オセアニアの kafa (Fij.) ／ ‘afa (Sam.)「帯糸」（*sic*）への変化も示しているが，オーストロネシア祖語からオセアニア祖語への分岐は起源前二千年以前に始まっており（Bellwood 1997），オセアニアにワタの導入が始まった年代は分からないものの，この年代まで遡上できるか疑わしい。フィジの場合，キダチワタ（*G. arboretum*）の栽培が始まったのは 1835 年以降

であり（Parham 1972），マルケサスでは，ヨーロッパ人の渡来後，ある種のワタの栽培が 1914 年には始まっていた（Barrau 1961）。なお，36）*kabu を参照せよ。

43）***kapur** カポール属（*Dryobalanops* spp.）フタバガキ科＞ kapur (Mal.) リュウノウジュ（*D. aromatica*）：kapol-kapol (Tag.) トウワタ（*Asclepias curassavica*）ガガイモ科：kapol (Ifg.) ブラジルワタ（*Gossypium barabadense*）アオイ科：hafotra (Mer.) ドンベヤ属（*Dombeya* spp.）アオイ科：hafotra (Betsim.) ヤマアサ（*Hibiscus tiliaceus*）アオイ科／グニディヤ・ダングヤナ（*Gnidia danguyana*）ジンチョウゲ科：hafotsy (Bara)「樹木の靱皮，繊維」。

Malay の kapur は大高木で芳香のある建材，一方，フィリピン，マダガスカルでは草本や小木でおもに繊維を採る植物に変化し，Betsimisaraka はグニディヤ・ダングヤナを指すこともある。Bara は普通名詞に変化している。マダガスカルの語末の -tra(-tsy) は，この言葉が Malay の借用語であるとみなす（Adelaar 1994）。

44）***kasay** ムクロジ科（Sapindaceae）の種類＞ kasai (Mal.) カサイノキ属（*Pometia* spp.）ムクロジ科／アムーラ属の一種（*Amoora rubescens*）センダン科：kasay (Bis., Tag.) ネム属の一種（バタイバトゥ）（*Albizia retusa*）マメ科：kasay (Bis) タングリン（*Adenanthera intermedia*）マメ科：kasay (BisPn.) グイオアの一種（*Guioa koelreuteria*）ムクロジ科：hasy (Betsim., Bezan.) ウルシ科（Anacardiaceae）の一種（*Faguetia falcata*）：hasy (Sak.) ／ hasi(-na) (Betsil.) キダチワタ（*Gossypium arboreum*）アオイ科。

マダガスカル以外ではほとんどすべてが高木の有用樹であるが，マダガスカルの方言形は，*kasi ＞ kasi (Mal.) マタクタム（*Gomphia hookeri*）オクナ科／イズセンリョウ属の一種（*Maesa indica*）ヤブコウジ科からの変化も考え得る。イズセンリョウは葉を皮膚病薬に，また Antandroy は hasy（*Gossypium* sp.）といい，葉汁を目薬にする（湯浅ほか 2000）。なお，Betsileo の hasi(-na) の -na は，23）*bintanguR を参照せよ。

45）***kiray** キントラノオ科（Malpighiaceae）の種類＞ kirai (Mal.) キントラノオ科の一種（*Hiptage sericea*）：kilay (Mbo., Tbl.) タコノキ属の一種（*Pandanus* sp.）タコノキ科：hiri-hiry (Betsim.) クリサリドカルプス属の一種（*Chrysalidocarpus arenarum*）ヤシ科。

低木で薬用のほか庭木として利用される。クリサリドカルプス（アレカヤシ）属はマダガスカルで建材ともなる。

46）***ki[R]ay** マメ科（Leguminosae）の種類＞ kigay-kigay (BisSL.) コガネタヌキマメ（*Crotalaria retusa*）マメ科：karay-kagay (Bik.) サンヘンプ（*C. juncea*）：kizy (Betsim.) ／ kijy (Prov.) キジイ属の一種（*Symphonia fasciculata*）オトギリソウ科。

Malay の 43）kirai は，この ***ki[R]ray** からも予想される形である。Bikol の karay-kagay の第一音節母音は逆行同化，前部要素の -r- は不規則である。サンヘンプは草本で縄作り用，キジイは小木，ただし樹脂が薬用として多用される。

47）+*kun[D]ur（D）／ *kundur（W）トウガン（*Benincasa cerifera*）ウリ科＞ kundur (Mal.)：hondro (Prov.) セイヨウカボチャ（*Cucurbita maxima*）ウリ科／ hondro (Tank.) ウリ科（Cucurbitaceae）の一種：akondro (Mer.) バナナ。

本項目は，（D）がマダガスカルで正規の音韻変化のもと，トウガンがセイヨウカボチャになるという意味変化とともに，二重語として語頭に前鼻音化を伴った *ngkun[D]ur に由来する a-kondro はバナナ（バショウ科）に変化することを示した。しかし，トウガンとバナナとの間の意味変化については不明な点が多い。これに荷担する説（Adelaar 1989）もあるが，バントゥ祖語 *-konde ／ *-koonde バナナから *-ngkondo を経て akondro が由来したとする借用語説（Dahl 1988）がより妥当と思われる。またバントゥ祖語の *-tangga ウリ科は voa-n-tango (Mer.) スイカ（ウリ科）の複合語のなかに残る。

48）***kusa** イネ科（Gramineae）の種類 ＞ kusa-kusa (Mal.) インドヒエ（*Echinochloa colona*）イネ科：kuse(-n) (Ibg.) ハスノハカズラ（*Stephania japonica*）ツヅラフジ科：hosa(-na) (Betsim.) ベロジア科（Velloziaceae）の種類（*Xerophyta dasylirioides* ／*X. eglandulosa*／*X. pinifolia*）。

インドヒエは水田の雑草，ハスノハカズラはつる草，マダガスカルのベロジアは固い繊維をもった単子葉の草本で岩場に生える。いずれも雑草である。Betsimisaraka の語末の -na は 23）*bintanguR を参照せよ。なお，*kumpay イネ科の種類（＞ kumpai (Mal.) ヒエ属の一種（*Panicum auritum*）イネ科：kumpay (Bgb.) アンペライの一種（*Machaerina disticha*）カヤツリグサ科：kumpay (Ifg.) オガサワラスズメノヒエ（*Paspalum conjugatum*）イネ科）も再構成することができるが，この形はマダガスカルで hompy (Tank.) として規則的に変化するものの，媚薬用になるという小木，ハリツルマサキの一種（*Maytenus fasciculatus*）ニシキギ科を指し，祖語形との関係は不明である。

49）***la(ng)kap** ムラダチサトウヤシ（*Arenga westerhoutii*）ヤシ科＞ langkap (Mal.)：lakap (Bkd.) アノス（*Schizostachyum lima*）タケ科：lakatra ／ lankatra (Betsim.) ヤ

シ科（Palmae）の一種（*Louvelia lakatra*）。

ムラダチサトウヤシは屋根葺きに，アノスは扇や籠また吹矢の筒に，lakatra はわら帽子材に用いられる。なお，語末子音は *tutup「覆う」＞ tototra「覆う」と同じ不規則的変化になるが，Malay の借用語とみなす（Adelaar 1994）。

50）***lusay** ナンヨウトベラ（*Pittosporum ferrugineum*）トベラ科＞ lusai (Mal.) ナンヨウトベラ：lusay (Sub.) ヒゲシバの一種（*Sporobolus diander*）イネ科：lusay-lusay (BinsPn.) シソモドキの一種（*Hemigraphis rapifera*）キツネノマゴ科：lusay (Tag.) ウミショウブ（*Enhalus acoroides*）トチカガミ科：lusay (Mgd.) クロモ（*Hydrilla verticillata*）トチカガミ科：lusay-lusay (BisC.) ホンダワラ属（*Sargassum* spp.）ホンダワラ科：losy (Mahaf.) クマヤナギの一種（*Berchemia discolor*）クロウメモドキ科：losy (Betsil.) スイバ（スカンポ）の一種（*Rumex bequaertii*）タデ科。

小木，草本が主で，フィリピンではウミショウブ，クロモ，ホンダワラのような水草，褐藻といった水中の植物にも及んでいるのが興味深い。薬効によるのか用途によるのか不明である。ナンヨウトベラにはサポニンが含まれ，湿布としてマラリア熱に，また魚毒に用いられる。マダガスカルでも意味変化が激しい。このなかでクマヤナギは樹皮を煎じて痛み止めにされる。

51）***mangkaDay** ヒメヒルギ（*Bruguiera parviflora*）ヒルギ科＞ mengkadai ／ lenggadai (Mal.) ヒメヒルギ：mangalay ／ hangalay (Tag.) ヒメヒルギ：hangalay (Bis.) ヒメヒルギ：manary ／ manara (Sak.) シタン（アジアローズウッド）属の一種（*Dalbergia greveana*）マメ科：manary (Tandr.) シタン属の一種（*D.* sp.）：magnary (Bara) シタン属の一種（*D. trichocharpa*）。

すべて高木で，家具，建築材として重要な樹木である。Antandroy は樹皮を占いに使う（湯浅ほか 2000）。変則的な語頭子音がインドネシア，フィリピンの語形に現れることがある。

52）*medang（D）「樹木の一種」／ *meDang（W）ゲッケイジュ‘laurel’／ *medang クスノキ科（Lauraceae）の種類＞ medang (Mal., Iban) ／ madang (NgD.) ／ modang (TB.)：marang (BisC., Tag.) マライハマビワ属の一種（*Litsea perrottetii*）クスノキ科：marang (Bik.) マラブンガ（*Nothaphoebe malabonga*）クスノキ科：madang (Mar.) マライハマビワの一種（*L.* sp.）：**merana** (Tank.) トウダイグサ科（Euphorbiaceae）の一種（*Androstachys imberbis*）：**merana** (Sak.) キク科（Compositae）の一種（*Brachylaena microphylla*）：**merana** (Mer.) キク科の一種（*B. merana*）：**merana** (Betsil.) ヨモギボク属の一種（*Vernonia merana*）キク科。

建築材として有用な中高木が多く含まれる。Flacourt（1658）は，オリーブの木のような葉で材は黄色く無臭，ツゲのように堅い植物として mera と記している。語尾の -na がすでにこの頃から，自由に脱着していたことが知られる。Adelaar のいうような借用語の問題ではない。（W）の再構成する -d- は，Dyen のそり舌音 -D- の書き換えのはずであるから誤記（誤解）か。また（W）の特定化した原義は適当ではない。

53）***munggu** ／ ***mungu**「薬用草本の種類」＞ munggu (Mal.) ビャクズク（*Amomum cardamomum*）ショウガ科：munggo ／ mungo (Tag., Bis.) ササゲ属の一種（*Vigna radiata*）マメ科：mongo (Betsil., Bara) ノボタン科（Melastomataceae）の一種（*Dionychia bojerii*）：mongo (Mer., Betsil.) カンジス属の一種（*Garcinia pauciflora*）オトギリソウ科：mongo (Betsim., Bezan.) オクロカルプスの一種（*Ochrocarpus bongo*）オトギリソウ科：mongy (Tandr.) カランコエ・ベハレンシス（仙女の舞）（*Kalanchoe beharensis*）ベンケイソウ科。

共通するのは草本（つる植物），マダガスカルでは木本，いずれもスパイス，薬用，染色用に重要で，Antandroy は葉を便秘，灰を膿の吸い出しに用いる（湯浅ほか 2000）。

54）*muntay（B1980/W）「ミカン類の一種」／ミカン科（Rutaceae）の種類＞ muntei (Ment.) ザボン（*Citrus maxima*）ミカン科：muntay (Sub.) ／ (ka-)muntay (Bik.) ／ (a-)montaw (BisPn.) スワンギ（*C. hystrix*）：**monty** ／ **monte** (Mahaf., Tanosy) タマリンド（*Tamarindus indica*）マメ科：**monty** (Betsim.) カリッサ（*Carissa edulis*）キョウチクトウ科：**monty** (Bezan.) キョウチクトウ科（Apocynaceae）の一種（*Cabucala striolata*）。

マダガスカルのタマリンド，カリッサはともに果肉に酸味があり，また清涼飲料にされる点でミカン科と共通する。Flacourt（1658）はタマリンドとして monte と記し，樹皮を煮て腫れ止めに，果実も薬用に広く使用するという。

55）*nibung（D）／ *anibung（B1988）／ *qanibung（W）ニボンヤシ属（*Oncosperma* spp.）ヤシ科＞ nibung (Mal.) ニボンヤシ（*O. filamentosa*）ヤシ科：anibong (Tag.) クジャクヤシの一種（*Caryota rumphiana*）：anibong (BisPn.) ニボンヤシの一種（*O. platyphyllum*）：**anivona** (Mer.) ／ **anivo** (Bara, Prov.) フロガ属の一種（*Phloga polystachya*）ヤシ科。

ニボンヤシは材に弾力があり，柱・床材，槍，繊維は縄に，**anivona** は建築材として，また松明や槍作りに利用された。

56）*pahuq（D）「樹木の一種」／ウルシ科（Anacardiaceae）の種類＞ pauh (Mal.) ウミソヤ（*Buchanania sessilifolia*）ウルシ科／マンゴウの一種（*Mangifera longipes*）ウルシ科：paho? (Bis., Tag.) フィリピンマンゴウ（*M. altissima*）：paho-paho (BisHl., BisPn.) カパラツンダン（*B. arborescens*）：**fao(-totra)** ／ **fo(-totra)** (Betsim.) サガリバナ属の一種（*Barringtonia butonica*）サガリバナ科：**fo(-totra)** (Sak.) オオバギの一種（*Macaranga cuspidata*）トウダイグサ科：bau (Fij.) ナンヨウトベラの一種（*Pittosporum brackenridgei*）トベラ科：pau (Sam.) オボトの一種（*Mammea odorata*）オトギリソウ科。

（D）の示した Tagalog 形 paho は誤りである。ウミソヤ，マンゴウは中高木，家具材として利用される。マダガスカルの語末要素 -totra は「埋まる」の意味，マダガスカルでは湿地における土台と柱作りに用いられるためか。

57）***pala**（S）ニクズク（*Myristica fragrans*）ニクズク科＞ pala (Mal., Jav.) ニクズク：pala-pala (Bik.) ミサオノキ属の一種（*Randia microcarpa*）アカネ科：pala-pala (Kal.) カミヤツデの一種（*Aralia bipinnata*）ウコギ科：fala (Betsil.) ／ fala(-na) (Mer.) クロタキカズラ科（Icacinaceae）の一種（*Cassinopsis madagascariensis*）。

この祖語形はサンスクリット語 phala-「果実」の借用語である。ニクズク ‘nutmeg tree’ の原産地は東インドネシアのモルッカ諸島であるが，インドに知られたのは西暦 5–6 世紀といわれる（農林省熱帯農業研究センター 1975）。ニクズク，ミサオノキはいずれも小木，種子はスパイスや薬用になる。クロタキカズラは草本でマラリア熱に薬効があるとされる。

58）***padang** カヤツリグサ科（Cyperaceae）の種類＞ padang (Mal.) キンゴジカ（*Sida rhombifolia*）アオイ科：parang (Tsg.) カヤツリ属の一種（*Cyperus javanicus*）カヤツリグサ科：farana (Betsim.) サンカクイの一種（*Scirpus corymbosus*）カヤツリグサ科。

フィリピン，マダガスカルにカヤツリグサ科が残り，これが原義であろう。キンゴジカは低木，雑草で薬用になる。Malay の padang は *pa(n)dang「草原」に由来する padang と同音異義になったため，キンゴジカは seleguri (seliguri) padang という複合語から単に seleguri とも呼ばれるのは，異分析の結果である。なお，69）*sedsed を参照せよ。

59）*pangi（B1989/W）クパヤン（パンギノキ）（*Pangium edule*）イイギリ科＞ pangi (OJ., NgD.) ／ pongki (TB.)：pangi (BisPn.) マンゴウの一種（*Mangifera monandra*）ウルシ科：**fany** ／ **fano** (Mer.) モダマ属の一種（*Entada chrysostachys*）マメ科：**fany**

(Sak.) ガラナの一種（*Paullinia pinnata*）ムクロジ科：**fany** (Bara) センナ属の一種（*Cassia anthoxantha*）マメ科／ダベマの一種（*Piptadenia chrysostachys*）マメ科。

クパヤンは種衣の味がドリアン（パンヤ科）に似ているため，ミクロネシアではドリアン系の言葉で呼ぶ地域（ポーンペイ，モキル，コシャエ）がある。フィリピンのマンゴウも味覚による変化であろう。しかし，クパヤンの種子は青酸を含み有毒である。**fany** ／ **fano** は Merina の聖木として領主の屋敷に植えられ，種子は占い（sikidy）で用いられる。

60）***piqay** アツイタシダの一種（*Acrostichum aureum*）ウラボシ科＞ piai (Mal.) ／ piai (Mbo.) アツイタシダの一種：fia(-hana) (Mer.) レモングラス（*Cymbopogon citratus*）イネ科：fia(-ndrilavenona) (Mer.) フユアオイ（*Malva verticillata*）アオイ科：fia(-pary) (Mer.) サトウキビ（*Saccharum officinarum*）イネ科ほか。

アツイタシダは海岸に生える草本で 2 メートル近く育ち，若葉は食用，根は砕いて傷薬にされる。マダガスカルでは fia- は複合語として残り（*-ay は -i と変化すべきであるが，この場合，語中に留まったためか），-hana「借りる」，-andry-lavenona「灰から守る」，-fary「サトウキビ」と合成している。レモングラスは香油採取のほか薬用に，フユアオイは軟化薬，罨法で腫れに利用される。サトウキビの fia-pary の fia- は fiaka「かす」が語源で「キビの絞りかす」の意味という（Boiteau 1999）が，それではなぜ他の語には「かす」の意味がないのか。fia- はかつての植物認識の痕跡かも知れない。なお，14）***balik** を参照せよ。

61）***pi(ng)ka** ソリザヤノキ（*Oroxylum indicum*）ノウゼンカツラ科＞ bika ／ bingka (Mal.)：bika (NgD.)：pingka-pingka (Tag.) ソリザヤノキ：feka (Mahaf., Tanosy, Tandr.) サンユウカ属の一種（*Tabernaemontana modesta*）キョウチクトウ科。

Malay, Ngaju-Dayak の語頭音 b- が不規則的変化（規則的には p-）である理由を説明できない。ソリザヤノキは中高木，樹皮，葉を痛み止め，胃薬，リューマチにと多用される。Antandroy は枝葉を煎じ，傷薬，目薬などにする（湯浅ほか 2000）。なお，フィリピンでは，ソリザヤノキを *pi(ng)ka でいう言語と，*ba(ng)luy ／ *bu(ng)luy（フサマメノキ（*Parkia javanica*）マメ科）由来でいう言語，banloy (Sub.), bungluy (Tsg.) がある。後者はマダガスカルには伝わらないが，後者を起源とする Malay の bunglui ／ bului ／ buli がソリザヤノキを表すことがあるので（Burkill 1966），語頭の不規則子音はこの多義現象による混乱かもしれない。

62）*pulut（W）オオボンテンカ（*Urena lobata*）アオイ科＞ pulut-pulut (Mal.) ／ pulut

(NgD.) アカメガシワ（ハガシワ）の一種（*Mallotus griffithianus*）トウダイグサ科／ノジアオイ（*Melochia corchorifolia*）アオイ科／トコンの一種（*Cephaelis griffithii*）アカネ科，その他：pulut (Ifg.) オオボンテンカ：pulut (Igt.) コセンダングサの一種（*Bidens leucorrhiza*）キク科：**folotra** ／ **folo-polotra** (Mer.)「（視野を遮る）低木の茂み」。

オオボンテンカは根が薬用になり，また大群落を作る。Merina の **folotra**／**folo-polotra** は植物名称の意味を失い，原義を承けた普通名詞に変化してしまった。

63）***resak** ＞バチカ属（*Vatica* spp.）フタバガキ科＞ resak (Mal.) バチカ属の一種（*V.* sp.）：lisak (Tag.) ルデック属の一種（*Neonauclea bartlingii*）アカネ科：resa (Bara) シッポウジュの一種（*Senecio vaingaindrani*）キク科。

バチカ，ルデックは中高木，シッポウジュは多肉植物で形態は異なるが，バチカ，ルデックは虫食いに強い家具材として，マダガスカルではリンパ線体質に薬効があるとされる以外に共通性はない。

64）*sabaqang（B1983–1984/W）センネンボク属（*Cordyline* spp.）リュウゼツラン科＞ sawang (Mal., NgD.) センネンボク（*C. fruticosa*）：sawang (Ilk.) ジャワソテツ（*Cycas rumphii*）ソテツ科：**sava** (Betsil.) ムギワラギク属（*Helichrysum* spp.）キク科。

マダガスカルにおけるムギワラギクの主要な用法は消毒であり，リュウゼツラン科やソテツ科との共通点である。

65）*saga（B1980）トウアズキ（相思豆）（*Abrus precatorius*）マメ科の「つる，種子」／ *saga（W）トウアズキ／ *sagah トウアズキ＞ saga (OJ., Mal.)：sagaʔ (Iban) ナンバンアカアズキ（*Adenanthera pavonina*）マメ科／トウアズキ（相思豆）／ジリン属の一種（*Pithecellobium angulatum*）マメ科：sagaʔ (Tag.) シロトウアズキ（*Abrus fruticulosus*）マメ科：saga-sagaʔ (Tag.) トウアズキ：saga (Tas.) ナンヨウイラノキ（*Dendrocnide stimulans*）イラクサ科：**sahy** (Mer., Bara) ベニノキ（*Bixa orellana*）ベニノキ科。

（B1980）の意味を限定しすぎる理由は明らかでなく，また *saga は Tagalog ほかの語末の声門閉鎖音が説明できない。トウアズキは「つる植物」で種子は薬用にされる。ベニノキは小木でアメリカ原産，種は着色，染色材となる。いつどのような経路でマダガスカルに入ったのか分からないが，闘牛に食べさせて大胆にさせる（sahy）からという語源説（Boiteau 1999）は信用できない。*sagah から Merina の **sahy** へは，28）*damaR を参照せよ。なお現在，マダガスカルでトウアズキは maso-amboa-torana (Mer.)「弱ったイヌの目」，maso-hamboa-gara (Sak.)

「狂犬の目」のような複合語でいう。

66）***sambung** タカサゴギク（*Blumea balsamifera*）キク科＞ sembung (Mal.) ／ sambong (Tag.) ／ sambun (Tsg.) タカサゴギク：sambo(-anambo-ambo) (Mer.)「リカーの一種」。

タカサゴギクは 2 メートルになり草全体にショウノウの香りがして，薬用としての用途のほか，根の煎じ汁を食欲不振時に飲む。マダガスカルでは複合語でしか残らないが，後部要素は -anana-ambo-ambo が短縮した形で「非常に大きい草」の意味をもつ普通名詞へと変化している。

67）***sanay** フタバガキ科（Dipterocarpaceae）の種類＞ sanai (Mal.) メルサワ属（*Anisoptera* spp.）フタバガキ科：sanay (Bis.) カンラン属の一種（*Canarium asperum*）カンラン科：sanay (Ilk., Neg.) ビヌアン（*Octomeles sumatrana*）ダティスカ科：sana (Mer.) ホルトノキ属の一種（*Elaeocarpus sericeus*）ホルトノキ科：sana (Betsim.) レプトラエナ属の一種（*Leptolaena bernieri*）サルコラエナ科。

*sanay はフィリピンの地方語でビヌアンを意味するので，18）*banu[w]ang を参照せよ。

68）***saray** イネ科（Gramineae）の種類＞ serai (Mal.) キャメルグラス（*Andropogon schoenanthus* Linn.）イネ科：serai (Iban) レモングラス属（*Cymbopogon* spp.）：salay (Tag.) レモングラス（*C. citratus* Stapf.）：(ma-)sira ／ (ma-)siry (Betsim.) レモングラスの一種（*A. intermedius*）。

69）*sedsed（B1986）「草，イグサの種類」＞ sesat (Mal.) スゲカヤ（*Hypolytrum latifolium*）イネ科：sesed (Mar.) テンツキの一種（*Fimbristylis globulosa*）カヤツリグサ科：sodsod (Bik.) ヒデリコ（*F. littoralis*）：**serasera** (Betsim.) イガガヤツリの一種（*Pycreus ferruginens*）カヤツリグサ科。

70）*sepang（B1988/V/W）／ *sapang スオウ（*Caesalpinia sappan*）マメ科＞ sepang (OJ., Mal., Iban)：sapang (Bis., Tag.)：**sefana** (Betsim., Bezan.) アカサヤクネスチスの一種（*Cnestis polyphylla*）マメモドキ科／ウルシ科（Anacardiaceae）の一種（*Protorhus viguieri*）。

『南方草木状』に「蘇枋」（su-fang）と記載されたのが中国でもっとも古い記録とされ（小林 2003），赤色の染料とする木類名称は，この *sapang を借用したと考えられる（山田 1958）。フィリピン形を説明するには，（B/V/W）の第一音節母音は適当でない。また *sapang はサンスクリット語 pattanga- 系の言葉という説がある（Burkill 1966）が，語形の不一致が目立つ。

71）***sili**「薬用小木の種類」＞ sili-sili(-han) (Tag.) オオチャラン（*Chloranthus elatior*）

センリョウ科：sili-sili (Tag.) ソケイ属の一種（*Jasminum aculeatum*）モクセイ科：sili-sili (Bon.) ヒポエステスの一種（*Hypoestes floribunda*）マタタビ科：sili-sili (Sub.) イヌホオズキ（*Solanum nigrum*）ナス科：sily (Mer.) クロトン属（*Croton* spp.）トウダイグサ科：sily ／ sely (Betsil.) ウオトリギ属の一種（*Grewia* sp.）シナノキ科：sely (Tandr.) ウオトリギ属の一種（*G. sely*）。

いずれも小木，ヒポエステス，イヌホオズキは草本で，花，葉が嗜好飲料となるほか，ジャワでは‘tea plant’が栽培される以前はオオチャランが茶として飲まれていた（Burkill 1966）。いずれも薬用（熱さまし），染料として利用される。マダガスカルでは意味する植物の分化が起こり，クロトンは煎じて子供の引きつけに，ウオトリギは樹皮を煎じ赤痢の治療，繊維が縄作りに利用される。Antandroy は枝葉を煎じ胃のむかつきに飲む（湯浅ほか 2000）。

（W）は祖語形 *siRi センネンボク（*Cordyline fruticosa*）リュウゼツラン科から sily (Mer.) を説明しようとした。すでに（B）（1983–1984）もマライ・ポリネシア祖語形として *nsiRi を建て sily を含めた。しかし，祖語音 *-R- から Merina へは規則的に z，語中では例外的に -r- ないしゼロに変化するのみで（Adelaar（1994）は Malay の借用語とみなす），-l- という変化は考えられない。*nsiRi については，西部マライ・ポリネシア語派からインドネシアのセンネンボクの例としてスラウェシ島の Bugis の siri（突出的語例，オセアニア方面からの借用語の可能性も排除できない），フィリピンの tigi (Ibg.) チトセランの一種（*Sanseviera zeylanica*）リュウゼツラン科，tigi (Ilk.) タシロイモ属の一種（*Tacca palmata*）タシロイモ科，そして西部ミクロネシアの Palauan の sis（語末の -s は *R からの規則的変化）センネンボクによって支持される程度である。*nsiRi はむしろオセアニア祖語形 *siRi ／ *tiRi など（Tryon 1994）として継承され，マダガスカルには達していない。なお，88）*zelay を参照せよ。

72）***sina** マメ科（Leguminosae）の種類＞ sena (Mal.) インドカリン（*Pterocarpus indicus*）マメ科：sina (Tag.) トウゴマ（ヒマ）（*Ricinus communis*）：sina (Bis.) マメ科（Leguminosae）の一種（*Archidendron clypearia*）：sina-sina (Mbo.) マンリョウの一種（*Ardisia cuprea*）ヤブコウジ科：sena-sena (Mer.) バナナボク属の一種（*Uvaria acuminata*）バンレイシ科。

樹形はさまざまであるが，インドカリンは樹皮を染色，薬用，トウゴマは種子からヒマシ油，バナナボクは果実が母乳の出をよくするほか，葉，根が消毒，駆虫剤となる。Flacourt（1658）は，sena は小木，葉に綿毛がありアーモンドのよ

うな大葉の植物で蜂蜜酒で沸騰し打撲傷に罨法するほか，下痢止めにするという。

73）***sugi** ムクロジ科（Sapindaceae）の種類 ＞ sugi (Mal.) グイオアの一種（*Guioa pubescens*）ムクロジ科／ sugi-sugi アポロサの一種（*Aporosa microcalyx*）トウダイグサ科：sohy (Sak.) ヘツカニガキの一種（*Adina microcephala*）アカネ科：sohi(-hy) (Tandr.) クスノキ科（Lauraceae）の一種（*Potameia thouarsii*）。

Antandroy の語末の -hy は -ha からの変化である可能性がある。なお，21）***barik**，36）*kabu を参照せよ。

74）***sungi** ／ ***sengay** カンラン科（Burseraceae）の種類＞ sungi ／ sengai (Mal.) サンチリアの一種（*Santiria wrayi*）カンラン科／メラワンの一種（*Balanocarpus penangianus*）フタバガキ科：sungay-sungay (BisPn.) キク科（Compositae）の一種（*Acanthospermum hispidium*）：sony (Bara, Mahaf.) アルオウディア・コモーサ（*Alluaudia comosa*）／アルオウディア・アームベルティ（*A. humbertii*）デイデイエレア科：songo ／ sono (Tandr.) アルオウディア・アッケンデンス（*A. ascendens*）。

サンチリア，メラワン，アルオウディア・アッケンデンスいずれも高木である。ただし，アッケンデンスは小枝がなく，葉が幹や太い枝から直接出た奇妙な樹形をしている（湯浅 1995）。この木を初めて見た移住者も呼び名に困ったことであろう。

75）***tabak** マラッカジンコウ（*Aquilaria malaccensis*）ジンチョウゲ科＞ tabak (Mal.) マラッカジンコウ：tabak (Tag.) ジュラン属の一種（*Aglaia pachyphylla*）センダン科：taba-taba (Bik.) ジュラン属の一種（*A. rimosa*）：tabak (Ilk.) モッコクの一種（*Ternstroemia toquian*）ツバキ科：tavaka (Bezan.) カリッサの一種（*Carissa sessiliflora*）キョウチクトウ科／トウダイグサ科（Euphorbiaceae）の一種（*Drypetes madagascariensis*）。

マラッカジンコウは沈香を採るためこの名があり，材が芳香をもつ点でジュランと共通し，果実が生食できるのがカリッサと同じである。

76）+*tabu（D）／ *tabuh「水くみ」＞ tawu (Jav.)：tabo? (Tag.)：tabo ／ (voa-)tavo (Mer.) ユウガオ（*Lagenaria siceraria*）。

祖語形は植物名ではない。Merina の tavo(-ara) は「（クワ科製の）水さし」を指すように原義を留める。Malay の tabu を「ヒョウタン・カボチャの類」というのは（Boiteau 1999），Malay のサンスクリット語 alābu- ユウガオの借用語 labu ウ

リ科の誤解か。

77）*talinga（B1983–1984）「キノコ‘tree fungus’の種類」。

この祖語形は「耳」が原義であるが，（B）は多くの言語からキノコを意味する複合語例を示している。このような比喩に基づく表現は，『和名抄』（西暦 10 世紀）のキノコをキ - ノ - ミミ「木の耳」という異名にも見える。また現在，そのようにいう方言もある。マダガスカルでも Betsimisaraka の **tadini(-boalavo)** ／ **tadini(-mpototra)** キクラゲの一種（*Hirneola auricula-judae*）キクラゲ科は tadini-「耳穴」と -voalavo「ネズミ」，-fototra「根本」との複合語である。一方，オーストロネシア祖語形としては *kulat（D）「菌，茸」／菌植物門（Fungi）が再構成されており，マダガスカルでは holatra ／ olatra (Mer.) に変化する。しかし，*talinga を独立した植物名称として掲げるのは適当ではない。このような扱いを認めると，「手」，「指」，「爪」，「目」，「舌」，「歯」，「ひげ」，「角」，「骨」，「ふぐり」，「こむら」，「尻尾」など，身体の特定部位に類推した複合語形の植物名称は，MLG を含むオーストロネシア諸語に多く見出され，歯止めがなくなる。無論，それはそれとして民俗認識の論文に仕上げることは歓迎すべきであるが。

78）***ta(m)bula**（S）キンマ（*Piper betle*）コショウ科＞ tembula (Jav.)：tabulo (Bis.) ヤマイモモドキの一種（*Cardiopteris moluccana*）ヤマイモモドキ科：tabolo (Sub.) モクベツシ（*Momordica cochinchinensis*）ウリ科：tambolo (Mer.) ゴマノハグサ科（Scrophulariaceae）の一種（*Buchnera leptostachya*）。

西部マライ・ポリネシア語派に入ったサンスクリット語 tāmbūla- キンマの借用語である。キンマ，ヤマイモモドキ，モクベツシはいずれも「つる植物」で，マダガスカルではキンマの葉を噛料とした用法が歯を黒く染めるため用いることに残る。

79）***tampuy** フトモモ属（*Syzygium* spp.）フトモモ科＞ tampoi ／ tempui (Mal.) オオミタンポイ（*Baccaurea griffithii*）トウダイグサ科：tampuy (Tag.) フトモモ（*S. jambos*）：tampuy (Ilk.) フトモモ属の一種（*S. subrotundifolium*）：tapo(-lahy) (Tandr.) キョウチクトウ科（Apocynaceae）の一種（*Hazunta modesta*）：tapo ／ tapi(-saka) (Mahaf., Tandr.) ウリ科（Cucurbitaceae）の一種（*Xerosicyos danguyi*）。

タンポイは高木，フトモモは小木，ともに果実が賞味され，フトモモにはアルカロイドが含まれ薬用としても多用される。Boiteau（1999）は tapo- が tapoka「枝を横に張った樹木」に由来するというが，そのような語の存在を確認できない。あるいは誤解か。複合形の語末部分の -lahy は「大きい」，-saka は「中ぐらい」

の意味である。キョウチクトウ科は小木，ウリ科はつる植物，いずれもアルカロイドを含み薬用に，前者の葉や樹皮は飢え渇きをしのぐために噛まれる。

80）***tangha[r]** ヒルギ科（Rhizophoraceae）の種類＞ tanghal (BisPn., Tag.) コヒルギ（*Ceriosp tagal*）：tanga (Sak., Mahaf.) ヤエヤマヒルギ（*Rhizophora micronata*）。

ヒルギ科に対し，下記の 82）も再構成し得る。祖語における方言レベルの違いであった可能性がある。フィリピンの言語にはそれぞれの継承形がある。マダガスカルの語中子音 -ng-[-ŋg-] は *-ŋg- からの変化と同類とみられるが，この例はマレー系言語の借用語，82）の *-ŋ- から -n- への変化は祖語形直系であるとみなす（Adelaar 1994）。

81）***taRuk** アマメシバの一種（*Sauropus albicans*）トウダイグサ科＞ taruk (Mal.) アマメシバの一種：tagok (BisSL.) パンノキ属の一種（*Artocarpus treculianus*）クワ科：tagok(-an) (BisPn.) トウ属の一種（*Calamus usitatus*）ヤシ科：taguk-taguk (Bis.) パラメリアの一種（*Parameria laevigata*）キョウチクトウ科：taroka ／ taro-taroka (Mer.)「植物の若芽」。

アマメシバ，パラメリアは小木，前者は葉が煮食され，根は薬用にされる。後者も煎じて下痢止めや傷薬になり，花葉は通経によいとされる。マダガスカルでは普通名詞に変化してしまった。

82）*[t]enge[r]（D）マングローブ／ *tengeR（W）コヒルギ属（*Ceriops* spp.）ヒルギ科＞ tengar (Mal.) コヒルギ属の一種（*C. candolleana*）：tangal (ManyLgs.) コヒルギ（*C. tagal*）：**teni(-na)** ／ **teno(-na)** (Mer.) チガヤ（*Imperata cylindrica*）イネ科：tegny (Bara)「背の高い草」：**teni(-na)** (Betsil.) グラジオラスの一種（*Gladiolus garnieri*）アヤメ科：dogo (Fij.) ／ togo (Sam.) ベニガクヒルギ（*Bruguiera gymnorhiza*）。

チガヤもヒルギと同じくよく繁茂し群落を作る。ただし，コヒルギは樹皮が褐色染料，チガヤは繊維が莫蓙，筵，屋根葺き材にされる。グラジオラスは火に強く秘儀（vorika）で使用される。Flacourt（1658）にサボンソウ（Saponaria）に似た草本として tongue と出ている植物はこれであろう。吐き気，毒消しに効くという。マダガスカルの語形は，一旦開音節化したあとにオーストロネシア祖語の属格接尾辞 *-na「その」が付いた可能性もある。なお，23）*bintanguR を参照せよ。

83）***tuwi** ツノノキ属（*Dolichandrone* spp.）ノウゼンカツラ科＞ tui (Mal.) ツノノキの一種（*Dolichandrone rheedii*）：tuwi (Tag.) ／ tuwi(-n) (Han.) ツノノキ（*D. spathacea*）：toi(-ana) ／ toi-(na) ／ tohi-(ana) (Mer., Betsil.) ヒゲシバの一種（*Sporobolus*

pyramidalis）イネ科：tohi-tohy (Tank., Sak., Tandr.) セイシカズラの一種（*Cissus quadrangularis*）ブドウ科。

ツノノキは海岸の小木，樹皮が縄材，葉が薬用，草本のヒゲシバも繊維が屋根葺きや帽子材になる。マダガスカル形で語中に -h- が現れるのは不純形で，規則的には -v- ないしはゼロと変化すべき。

84）+*zabi（D）「樹木の一種」／ *Zabi（W）イチジク属の一種（*Ficus* sp.）／ *zabay クワ科（Moraceae）の種類＞ jawi-jawi (Mal.) ／ jabi (TB.) シダレガジュマル（*F. benjamina*）クワ科：daway (Gad.) チビイチジク（*F. nota*）クワ科：**zavy** (Betsim., Bezan., Sak.) イチジク属の一種（*F. trichopoda*）クワ科：savi(-rewa) (Fij.) タイヘイヨウイヌビワ（*F. tinctoria*）クワ科。

（D）の祖語形に Adelaar（1989）や（W）も従うが，この形からはフィリピン形を説明できない。また原義は「樹木の一種」ではなく，また Adelaar（1989/W）が与える意味，イチジク属の一種でもなく，クワ科の種類を指すとみるのが妥当であろう。

85）*zambay（D）ビンロウ（*Areca catechu*）ヤシ科＞ jambe (OJ., Sun.) ／ jambi (Jav.) ビンロウ：**zaby** ／ **zabe** (Mahaf., Tandr.) オペルクリカリア・モンストゥルオサ（*Operculikarya monstruosa*）カンラン科（またはウルシ科）。

Antandroy は **jaby** ／ **jabihy** とも記され（湯浅ほか 2000），煎じた枝葉は産児の沐浴，女性薬，食欲増進など多方面に用いられる。（D）は変化語に jambi (Mal.) を含めるが，誤りである（Burkill 1966）。Malay, Toba-Batak の固有名称は pinang（インドシナ半島の Vietnamese の binh lang はチャム語群からの借用語，Cham の pinang ／ pinöng ／ panơng と海南島の回輝語（Poi^{35} Tsat^{21}）の naang^{33} は継承語，後者はチャム語群の言語）で，『南方草木状』では果類として「檳榔」（pin-lang）と記載される植物で，気を下し穀物を消化する効果があるとされる（小林 2003）。檳榔はオーストロネシア祖語形 *pinang の借用語であることが明かであるが，この語形はフィリピンの pinang (Tag.) バロンアイアム（*Antidesma ghaesembilla*）トウダイグサ科のほかにはマダガスカルに伝わった痕跡がない。

86）***zambu**（S）ムラサキフトモモ（*Syzygium jambolana*）フトモモ科＞ jambu (Mal.) フトモモ属（*S.* spp.）：jambu (Iban) グワバ（*Psidium guajava*）フトモモ科：yambu (Tag.) マライフトモモ（*S. malaccense*）フトモモ科：zambo (Tank.) ロパロカルプス科（Rhopalocarpaceae）の一種（*Rhopalocarpus triplinervius*）：zambo(-rizano／-rozano) (Mer.) フトモモ（*S. jambosa*）。

ロパロカルプス科はマダガスカルの固有科とする説とスファエロセパルム科（Sphaerosepalaceae）に含める説がある（湯浅 1995）。Merina は原義を維持するが，語末要素はフランス語の‘pomme rose, jam rosade’の形容詞をなぞったものか。この祖語形はサンスクリット語 jambū- ムラサキフトモモが語源である。Tagalog の yambu の語頭音は *zadi「なる」＞ yari「起こる」などと同じく例外的（規則的には d-）変化である。

87）*zawa（D）／ *zawah（S）オオムギ，ミレット＞ jawa (Mal.)「ジャワ」: jaba (TB.) ／ jawɛ (NgD.) ソルガム（モロコシ）（*Sorghum vulgare*）イネ科：dawaʔ (Tag., Bis.) コアワ（エノコアワ）（*Setaria italica*）イネ科：dawa-dawa (Tag.) ヒエ（*Echinochloa crus-galli*）イネ科：**davy** (Betsim.) タデ属の一種（*Polygonum senegalense*）タデ科。

この祖語形はサンスクリット語の借用語であり，（D）の項目に借用語という指示がないのは誤りである。ただし，サンスクリット語 y- からは変化せず，サンスクリット語の方言形プラークリット語 j- と対応する（Gonda 1973）。インドネシアのジャワの語源として Ptolemaios（西暦 2 世紀）の iabadiou，法顯佛國記（西暦 414 年）の耶婆提は yava-dvīpa「ミレットの島」を写したといわれるが，マダガスカルでは田畑の畦に生える雑草（ただし顆果は三稜形の瘦果のみ）に意味変化した。*zawah から **davy** へは，28）*damaR を参照せよ。

88）*zelay（D）「草名」／ *zelay ／ *delay（V）ジュズダマ（*Coix lachryma-jobi*）イネ科／ *qaZelay（W）ジュズダマ＞ jelai ／ enjelai (Mal.)：jali (Jav.)：hajeli (Sun.)：jelɛi (NgD.)：aglay (BisC.)：agley (Bon.)：dalay ／ delay (Sub.)：**tsilai(-mbery)** (Betsim.)。

この祖語形に対し Wolff（1982）は *zelai「草の一種」を示していたが，この新しい *qaZelay はフィリピン形のすべてを説明するため再構成された形である。しかし，軟口蓋音と歯音の閉鎖音（摩擦音ではない！）を同時に音声学的に説明できるような祖語音が存在するか，はなはだ疑問である。（V）は *zelay に対し *delay を二次形‘variant’として建てる。著者は（V）の再構法を妥当とみなす。マダガスカルでは Betsimisaraka の語頭子音 ts- が *z からの変化として不規則で，z- または dz- となるのが規則的である。ただし，*zingkit（＞ jingkit ／ jingking (Mal.)：(ke-)jingkiʔ (Iban)）「つま先で歩く」が tsingy「つま先で歩く」，*qizaw「緑色」が (ma-)itso「緑色」のようにマダガスカルで ts に変化する例もあり，これに類する例外的変化と考えられる。語末の二重母音 *-ay は複合語の前部要素として -i とならず -ai のまま残ったのであろう。マダガスカルの語源について tsy

laitra「支持されないもの」と very「奴隷にされて」とが複合した言葉で，かつて娘が奴隷として売られたとき，ジュズダマの首飾りでさえ着けてゆくことが許されなかったから（Boiteau 1999）というが，いかがなものか。Betsimisaraka は voa-mbarika「ネズミキツネザルの一種 varika（*Microcebus* sp.）の実」ともいう。なお，13）*balija, 71）***sili** を参照せよ。

89）***zirah** マメ科（Leguminosae）の種類＞ jirah (Mal.) スマメカツラの一種（*Adinobotrys atropurpureus*）マメ科：dila-dilaʔ (Tag.) ナムナムノキの一種（*Cynometra elmeri*）マメ科：jira (Tanosy)／zira (Tandr.) キク科（Compositae）の一種（*Psiadia angustifolia*）。

Antandroy は葉を煎じビタミン剤にする（湯浅ほか 2000）。Tanosy の jira の語頭子音は不規則（規則的には z-）である。

90）*zuru（D）「突端」／ミズヒイラギ属（*Acanthus* spp.）キツネノマゴ科＞ jeruju (Mal.) ミズヒイラギ属：dulu(-wariyu) (Tag.) コバナミズヒイラギ（*A. ebracteatus*）：**zoro** (Betsim.) ／ **zoro-zoro** ／ **zo-zoro** (Mer.) カヤツリ属の一種（*Cyperus madagascariensis*）カヤツリグサ科。

Malay の jeruju は重複形 *juru-juru を経た形である。ミズヒイラギは小木で薬用，カヤツリは草本で敷物などにされ，前者は葉が鋸歯状でとげがあり，後者は茎が三角柱で角状をなすのが共通点と考えられる。**zoro** には「角（かど）」の意味もある。（D）は祖語形を植物名称とはせず，zoro「角」とともに juru (Mal.)「熟達者」，joho (NgD.)「尊大」：dulo (Tag.)「果て」を対応例として示すのみ。（D）説が正しいとすると，植物名は比喩的に発生したことになる。

4　むすびにかえて

マダガスカルの言語におけるオーストロネシア系言語の植物名称の豊富さは，山野で草木に親しみつつ建築材や家材を得，薬用への深い知識を保ちながら焼畑農耕を営んでいた陸稲栽培民族が，マダガスカルの民族構成の古層を形成したためと考えられる。「はじめに」で述べたような Ma’anyan は系統的語彙的に西部バリト亜語群の Ngaju-Dayak と近縁とみなされるが，本稿の主題である植物名称に限ってみても，インドネシアでは Malay 以外には正確で詳細な情報がきわめて乏しいか皆無なのが現状で，バリト語群の場合も Hudson（1967）の語彙リストに栽培植物名が数項目掲げられているのみである。‘leading language’ともいえる Ma’anyan について本稿で十分な比較の対象とすることができなかったのは遺憾である。このもっとも古い故地の問

題は，バリト語群を中心としたカリマンタン内部の言語との民俗語彙を含む比較研究の進展により，今後さらに明らかになると考えられる。

謝　　辞

本稿は，国立民族学博物館共同研究会「マダガスカルの文化的多様性に関する研究」（代表者・飯田　卓国立民族学博物館准教授）において口頭発表した「マダガスカルにおける植物名称の意味変化」（平成 20 年 1 月 26 日）に基づき，執筆したものである。発表の際，植物学の湯浅浩史東京農業大学教授，言語学の菊澤律子国立民族学博物館准教授，その他出席者の方がたから示唆的なコメントをいただいた。また本稿を査読された複数の方がたと研究出版委員会からの具体的な指摘により手を加えた箇所もある。この場を借り関係者にあつくお礼をもうしあげる。

文　　献

Adelaar, K. A.
1989 Malay influence on Malagasy: linguistic and cultural-historical implications. *Oceanic Linguistics* 28(1): 1–46.
1994 Malay and Javanese loanwords in Malagasy, Tagalog and Siraya (Formosa). *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*. 150(1): 50–65.
1995 Asian roots of the Malagasy: a linguistic perspective. *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde*. 151(3): 325–356.
Barrau, J.
1961 Subsistence agriculture in Polynesia and Micronesia. *Bernice P. Bishop Museum Bulletin* 223.
Bellwood, P.
1997 *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*. Honolulu: University of Hawai‘i Press.
（B）Blust, R.
1980–1989 Austronesian etymologies. *Oceanic Linguistics* 19(1-2): 1–181, 22–23(1-2): 29–149, 25(1-2): 1–123, 28(2): 111–180.
1988 The Austronesian homeland: a linguistic perspective. *Asian Perspectives* 26(1): 45–67.
Boiteau, P.
1999 *Dictionnaire des noms malgaches de végétaux*. 5 tomes. Grenoble: Éditions Alzieu.
Burkill, I. H.
1966 *A dictionary of the economic products of the Malay Peninsula*. 2 vols. Kuala Lumpur: Ministry of Agriculture and Co-operatives.
Cabanis, Y., Chabouis, L., et F. Chabouis
1970 *Végétaux et groupements végétaux de madagascar et des mascareignes*. 4 tomes. Tananarive: Bureau pour le développement de la production agricole.
Casparis, J. G. de
1975 *Indonesian palaeography: a histroy of writing in Indonesia from the beginnings to C. A.D. 1500*. Leiden/Köln: E. J. Brill
Dahl, O. C.
1951 *Malgache et Maanjan*: *une comparaison linguistique*. Oslo: Egede-Instituttet.
1991 *Migration from Kalimantan to Madagascar*. Oslo: The Institute for Comparative Research in Human Culture, Norwegian University Press.
1988 Bantu substratum in Malagasy. *Études Océan Indien* 9: 91–132.
（D）Dempwolff, O.
1938 Austronesisches Wörterverzeichnis. Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes

III. *Zeitschrift für Eingeborenen-Sprachen* 19.
Doran, E. Jr.
1981 *Wangka : Austronesian canoe origins*. Texas: A & M University Press.
Dyen, I.
1971 The Austronesian languages and Proto-Austronesian. In T. A. Sebeok (ed.) *Current Trends in Linguistics* 8, pp. 5–54. The Hague: Mouton.
Flacourt, de
1658 *Histoire de la grande isle Madagascar*. Paris: Chez Pierre L'Amy.
Fransisco, J. R.
1971 *The Philippines and India: essays in ancient cultural relations*. Manila: National Book Store.
Gonda, J.
1973 *Sanskrit in Indonesia*. (revised edition) New Delhi: International Academy of Indian Culture.
Hudson, A. B.
1967 The Barito isolects of Borneo. A classsification based on comparative reconstruction and lexicostatistics. *Data Paper* 68. Ithaca: Southeast Asia Program, Department of Asian Studies, Cornell University.
Madulid, D. A.
2001 *A dictionary of Philippine plant names*. 2 vols. Makati: The Bookmark, Inc.
Merrill, E. D.
1923–1926 *An enumeration of Philippine flowering plants*. 4 vols. Manila: Bureau of Printing.
Parham, J. W.
1972 *Plants of the Fiji Islands*. Suva: The Government Printer.
(V) Verheijen, J. A. J.
1984 Plant names in Austronesian linguistics. *NUSA* 20.
Tryon, D.
1994 Oceanic plant names. *Pacific Linguistics* C-127: 481–509.
Wolff, J. U.
1982 Proto-Austronesian *c, *z, *g, and *T. *Pacific Linguistics* C-75: 1–30.
(W) Wolff, J. U.
1994 The place of plant names in reconstructing Proto Austronesian. *Pacific Linguistics* C-127: 511–540.
Zorc, R. D. P.
1994 Austronesian culture history through reconstructed vocabulary. *Pacific Linguistics* C-127: 541–594.

飯田　卓
2008 『海を生きる技術と知識の民族誌――マダガスカル漁撈社会の生態人類学』京都：世界思想社。
大林太良・杉田繁治・秋道智彌編
1990 『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析』（国立民族学博物館研究報告別冊 11）。
鹿野忠雄
1946 「バシ海峡を中心とせる臺灣とフィリッピンの文化關係――動植物語彙より見たる」『東南亞細亞民族學先史學研究』1 pp. 113–161，東京：矢島書房。
コーナー，E. J. H.・渡辺清彦
1969 『図説熱帯植物集成』東京：廣川書店。
小林清市
2003 『中国博物学の世界――「南方草木状」「斉民要術」を中心に』東京：農山漁村文化協会。
近藤典生（編著）
1997 『バオバブ――ゴンドワナからのメッセージ』東京：信山社。
熱帯植物研究会（編）
1996 『熱帯植物要覧』東京：養賢堂。

農林省熱帯農業研究センター
1975 『熱帯の有用作物』（熱帯農業技術叢書第 9 号）東京：（財）農林統計協会。
崎山　理（Sakiyama, O.）
1991 「マダガスカルの民族移動と言語形成――民俗語彙・植物名称の意味的変遷から」『国立民族学博物館研究報告』16(4): 715–762。
1999 「マダガスカルの植物命名法」中尾佐助・秋道智彌編『オーストロネシアの民族生物学――東南アジアから海の世界へ』pp. 125–151，東京：平凡社。
2002 「絶滅したマレー語――南アフリカ共和国」『環太平洋の言語・現地情報コラム』(http://www.elpr.bun.kyoto-u.ac.jp/genchi.htm). (1 Jan. 2009)
2004 「マダガスカル語系統研究その後」*SERASERA*（マダガスカル研究懇談会ニュースレター）11: 1–3。
高谷好一ほか 5 名
1989 「座談会・マダガスカルの農耕――そのマレー的要素について」『東南アジア研究』26(4): 430–454。
山田孝雄
1958 訂正版『国語の中に於ける漢語の研究』東京：宝文館出版。
湯浅浩史
1995 『マダガスカル異端植物紀行』東京：日経サイエンス社。
湯浅浩史・阿部主計・Rakotozafy Armand・Andriamahery Rivo Robinson
2000 「マダガスカル島アンタンドロイ族の薬用植物」『進化生物学研究所研究報告』9: 219–246。